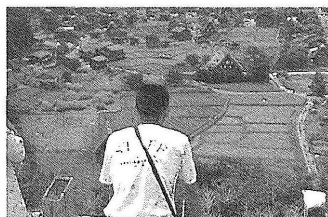


第1章
まなざし



雇写真Ⅱ 荻町をみつめる白川村役場職員

1 白川村と「白川郷」

白川村は岐阜県の北西、富山県、石川県との県境にある。村の面積は三五・五五平方キロメートルと非常に大きく、九五%を山林が占めている。山の間を縫うように、村を南北に貫いているのが庄川で、川沿いにはいくつかの集落が点在している。白川村の中央に位置する荻町は、庄川の河岸段丘上に形成された比較的大きな集落で、「白川郷・五箇山の合掌造り集落」として平成七年に五箇山（富山県南砺市相倉、菅沼）と共に世界遺産に登録された。世界遺産に登録されている「白川郷」も、はじめから「遺産」だったわけではない。昔は白川村周辺ではあたりまえだった合掌造りの建物とそれをとりまく「農村風景」がとても貴重なものになったこと、そして、それを大切にまもっていかうという人々の心の動きがあいまって、「遺産」が誕生したのである。

図1-1は「白川郷」として最も多くのパンフレットに使用されている展望台からの景色である。ここから見える荻町という場所そのものは、歴史の流れのなかで変化しながら常に存在していた。しかし、「世界遺産の白川郷」としてこの景色が認識されるためには、人々がこの場所と景色を発見すること、そして景色の画像が「白川郷」のイメージと共に世界中に広がっていく必要があったのである。

それでは、なぜ、どのような経緯で、どのような社会背景を経て「白川郷」が遺産として、世界に認識されるようになったのだろうか。世界遺産になった「白川郷」を理解するには、この「なぜ」が



図 1-1 展望台からの風景

広告、雑誌、テレビ番組などで必ず出る「白川郷」の写真（平成 16 年）

ぜひとも必要である。まずはじめに外部からの人々のまなざしがどのようにして遺産としての「白川郷」をつくりあげたのかを追っていききたい。

まなざしの蓄積を明らかにするために、白川村に関して書かれている明治期から現在までの資料を用いて、それぞれの時代に白川村が人々の目にどのように映っていたのか、背景も踏まえて述べていくことにする。白川村に書かれている資料にはさまざまな種類があるが、地誌や随筆など一般向けの紹介と専門的な研究の大きくふたつに分けることができる。書いている人の立場や動機によって映し出される白川村の「像」は異なる面もあり共通する面もあるが、このふたつは決して独立しているわけではなく、同じ時代背景のもとに互いに影響しつつ書かれているものである。

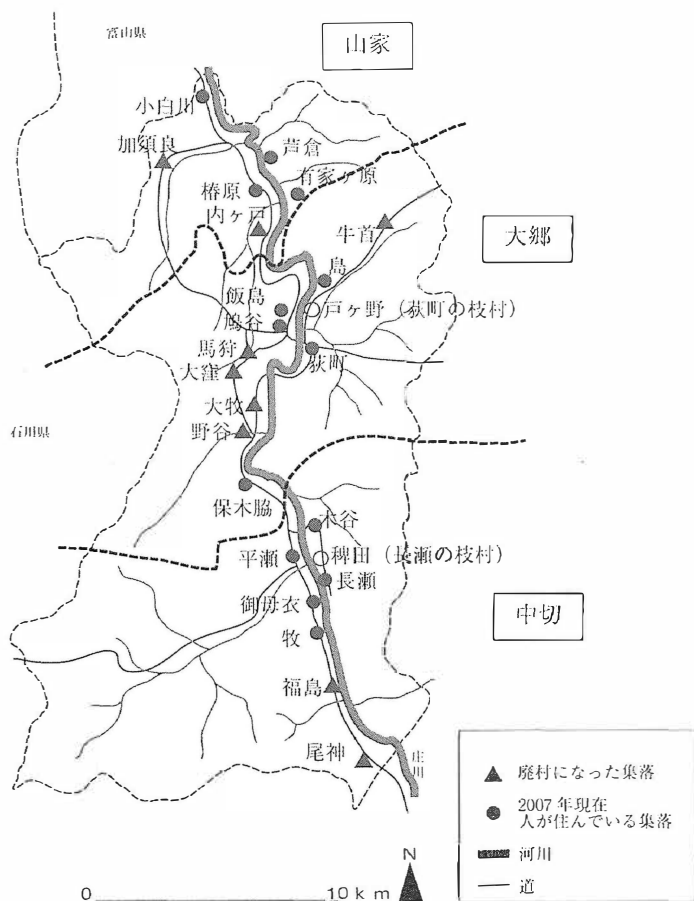


図1-2 白川郷のうち白川村に編入された23ヶ村

参考：大野郡白川村史編纂委員会『白川村史全』巻末地図（昭和43年）／宮澤智士『白川郷合掌造りQ & A』p.34（平成17年）

もうひとつ、本章では白川村のなかでどの地域が注目されていたのかもあわせて把握していく。世界遺産になっている荻町は白川村に十八ある集落のうちのひとつに過ぎない。江戸時代には「白川郷」というのは現在の莊川村、白川村、清見村の一部の合計四十二ヶ村のことであった（図1-2）。明治八年（一八七五）の町村合併において四十二ヶ村のうち二十三ヶ村が白川村、十八ヶ村が莊川村となり、残りの森茂村は清見村に編入された。つまり、本来の「白川郷」はほぼ莊川村と白川村をあわせた大きな地域だったのである。つい最近までふたつの村をあわせて「莊白川」という呼び方をすると、きもあつたが、平成十七年の合併によって莊川村は高山市に編入されたため、本来の白川郷のまともりは完全に崩壊してしまった。白川村の二十三ヶ村は南から中切七集落、大郷十集落、山家六集落の三つの地域に分かれていたが、現在はダムや集団離村で中切五集落、大郷五集落、山家四集落のみに人が生活している。

2 「大家族」から始まった合掌造りの建物の研究

白川村研究のはじまり

白川村研究のはじまりとして多くの文献にもあげられているのが明治二十一年（一八八八）東京人類学雑誌に掲載された藤森峯三の「飛騨ノ風俗及其他」である（図1-3）。この論文はまず白川村の人の「顔」の説明から始まっている。白川村の人の「容貌」は大きく二種類に分けることができ、ひとつは細面で鼻筋が高く頭髪が薄いもので、もうひとつは額が広く髪が濃く黒くて骨格も太いと書かれていて、二種類の「鼻」の図があわせて掲載されている。白川村の研究のはじまりが「容貌」というのがおもしろい。気のせいかもしれないが、今の白川村の人の中にも「白川顔」とでもいえる鼻筋の通った色白の男前や、目にとっても力があつて眉毛の太い顔を見ることができ、この論文が書かれたのは明治中期であり、「学問」を成立させようと日本が動き始めた時代であることを考えると、これが住民の骨格の「科学的な分類」によって、地域の特徴をとらえようという試みでもあったと理解できる。

さて、この論文が白川村への「まなざし」として重要なのは容貌の分類ではなく、「大家族」やその生活に言及しているところにある。「大家族」という名称は使っていないものの、「此地習慣ノ奇ナルハ多人數合居ナリ」として、木谷與兵衛治小左衛門、御母衣みほろの遠山伊助、長瀬の大家保太郎などの各家の家族構成や生活、生業について詳述している。明治期から昭和中期まで白川村の「大家族」

図 1-3 「住民の容貌」の図

藤森峯三「飛騨ノ風俗及其他」『東京人類學會雜誌第二十九號』東京人類学会
(現在の日本人類学会) p. 305 (明治 21 年)

制は民俗学・社会学の大きな研究テーマであった。「大家族」では時には三十人から四十人がひとつの合掌造りの建物に住んでいた。大きな合掌造りの建物に四十人もの「家族」が忙しく暮らしていたのだから、さぞや賑やかなものだったにちがいない。「大家族」制ではこの四十人のうち、夫婦で住むことができるのは家長と長男のみで、残りの家族はすべて、次男以下の男性が他家の未婚の女性のもとに通う「妻どい」形式の結婚形態であったことが特徴とされている。「妻どい」夫婦の子供は母親の家で育てられ、
は「私生児」となった。「大家族」制が見られたのは白川村の南部の中切地区と北部の山家地区の一部のみで、世界遺産の萩町がある大郷地区では見られなかつ

たという。「大家族」制は正時代の中ごろまで続いたとされている。山に囲まれて土地が狭いため、米も十分つくることができず、焼畑に頼って生活をしていったこと、養蚕を続けていくために働き手を家に確保しておく必要があったことが「大家族」が成立した要因であるとも言われている。民俗学や社会学ではこの「大家族」制について、ありとあらゆる角度から研究が進められ、「容貌」に始まった白川村研究の対象は「大家族」になってから大きく展開した。

「大家族」から合掌造りの建物へ

今は注目の的である合掌造りの建物も、はじめは「大家族」の説明の一部として取り上げられていたにすぎない。最も早い時期に白川村の自然、人口、家族構成、職業などのデータを詳細に集めたのは社会学者の高木正義であった。高木は「一般の民情風習は勿論、奇の奇なるもの、微の微なるものまで詳細遺脱なく探求」することを目標として、白川村に向かった。これによると、明治三十一年（一八九八）の白川村の人口は二千九百七十人（ちなみに平成十九年二月現在は千八百九十九人）、職業は人夫千五百八十二人、木挽十二人、医師三人、鍛工、袖職、獣医、石工、大工、桶工がそれぞれ一人となっている。

高木は「大家族」については家長の権力が「専制国の君主」ほどあること、家長夫婦の関係は「頗る厳粛謹慎」で、みだらな行為などは一切なかったことを記している。さらに、質素で素朴で欲もないため、犯罪がとても少なく明治二十二年（一八八九）からの十年間でわずか三十五件だったとも書かれている。山の中の小さな村で「専制君主制」が敷かれ、家族のものは従順で貞淑で、皆まじ

めで犯罪もない、という「別世界」の様子が詳述されているのである。詳細な聞き取りとデータ収集から社会学者高木が出した結論は、外界からの影響が社会の性質に影響付けること、川のそばに社会が発達すること、小さな社会も決して単一の祖先を持っているわけではないこと、日本にはまだ他にも「奇習異族太古の風」を持っているところがあるから大掛かりな調査が必要なことの四点であった。最後は、こうした詳細な山村の社会調査を国家事業にするべきで、そのためには鉄道会社や郵船会社からの旅費の割引や援助があると良いのだが、といささか嘆願めいた締めくりとなっている。

民俗学や社会学ではこの後、「大家族」について論争が巻き起こり、それが特に奇妙なものではないという証明や、家長の権力、あるいは「大家族」そのものが消滅する過程やその要因等についての議論が沸騰する。こうした「大家族」に関する研究は戦争をはさんで一九三〇年から一九五〇年代まで盛り上がりを見せるが、その後「大家族」そのものを論じる論文はごく少なくなり、かわって、焼畑や宗教と内容の多様化が見られる。柿崎はこの「大家族」研究のまとめとして次のように述べている。

白川村の『大家族』制は、過去に多くの研究者たちによって取り上げられ、また、さまざまな見解が発表されてきた。しかし、それらの研究は白川村の人々の生活を的確に理解しておらず、特異な現象として誤った見方や興味本位に取り上げていることも少なくなかった。それがマスクミ等の宣伝と呼応して世間に広がり、白川村の、とりわけ中切地区の人々に無用の劣等感を抱かせる結果になったことは、たいへん不幸なことであった。⁽⁶⁾

研究というのは対象を相対化し、それぞれの専門的な視点に沿ってストーリーを組み立てることで成り立っている。白川村をめぐる研究者の騒動は「大家族」に始まり、分野を変えて対象が「世界遺産」となった今でも続いていることを考えると、時代は変われど研究者の貪欲さは変わらずといったところだろうか。

高木は読売新聞の記事を教授に示されたことがきっかけで白川村の研究をしたと述べているが、このように白川村に関する記事や論文がきっかけとなって、次々に白川研究が始められることになる。明治大正期の民俗学や社会学における白川村研究は主として藤森の言うところの「奇なる習俗」がどれだけ「奇」であるかということに主眼が置かれている。

さて、この初期のころの大家族研究にもわずかではあるが合掌造りの建物が取り上げられていた。藤森は長瀬の大家家に宿泊したと記しているが、その暮らしの説明の一部として「家屋は草葺ニテ三階又ハ四階ナリ」と合掌造りの建物について触れている。このように合掌造りの建物は奇妙な「大家族」の生活の説明として、ほとんどの論文に取り上げられているのである。しかし、はじめは不可分のものとして語られている「大家族」と合掌造りの建物は、その後研究が重ねられるにつれて民俗学や社会学は「大家族」、建築学は合掌造りの建物というように、それぞれの分野に特化されていくことになる。

3 「太古の遺風」をもとめるまなざし

明治四十二年（一九〇九）、白川村が全国雑誌である「風俗画報」で紹介された。「風俗画報」は明治二十二年（一八八九）から大正五年（一九一六）まで「人事を始め土木、工藝、器財、動物、植物其他遊戯の末に至るまで」⁶⁸を絵と文章にして後世に伝えようという趣旨のもとに刊行された国内初のグラフ雑誌で、全国のさまざまな地域やイベントを取り上げている。当時の貴重な写真なども掲載されていて、その時代の雰囲気や味わうには格好の史料でもあり、「風俗画報」に掲載されているということは、当時の世相を反映した興味の対象となっていたと言えることができる。

「風俗画報」全五百十八冊のなかで白川村が取り上げられているのは、四冊で近藤頼柳という書き手による「斐太の白川」という連作であるが、書かれている内容と図は同じ年に岐阜県農会から出された岐阜県農会雑誌の「農村白川村」⁶⁹と酷似しており、おそらくこれをもとにして一般の興味を引くような内容に再構成したものと考えられる。

この一連の記事の論調は「衣食住も往時と異なるなく、宛然太古の風を存す、以下項を分ち本村の人情風俗を詳述すべし」というもので、当時隔絶された場所であった白川村に、太古の風俗がタイムスリップして残されているのではないかという視点から書かれた文章である。内容は地勢、経済、交際、風俗、衣服體装、食物、住屋、厠、橋梁、籠渡、家族のしくみと実に多岐にわたっている。一例をあげると、たとえば「経済」では、三百二十戸、人口三千五百人あまりが養蚕を生業としているこ

と、住民は真面目で「上納」(税金)を滞納したことがないことなどが書かれている。また、木綿は美濃に、酒は越中に、日用品は城端(現在の富山県南砺市)や高山に買いに行くとも書かれている。さらに、「交際」では排他的なところもあること、「風俗」では「高山邊にては美人を白川女とさへいへり」と、白川の女性が美しく信心深いという記述も見られる。「衣服體装」では女性の装束について裾模様付の紋付を着て帯を長くたらし、かんざしをたくさんつけている様子は「五六十年前の御殿女中に似たり、實に古風なりといふべし」としている。また、家屋についてはその形が「恰も神殿の如き」とされ、「大家族」についても最後に系統図付で述べられており、かなり網羅的な「白川村紹介」として完結している。美女が江戸時代の御殿女中のようなでたちで働いており、その家は「神殿」であるという、竜宮城の夢のようなイメージが膨らんでいて、先ほどの社会学者の高木正義による白川村紹介からさらに転じて一般読者向けにロマンチックな記述になっていることがわかる。

「風俗画報」から少し時代を経た大正九年(一九二〇)、さらに詳しい白川の風俗の紹介として、郷土誌である「飛騨史壇」に「飛騨の白川」というタイトルで大鶴利三郎が紹介した記事があるが、これは三十頁にわたって、白川の人々の生活がことこまかに記述されたものである。ここでも家屋から生業、「大家族」にわたる幅広い風俗が紹介されているのだが、人々の信仰が篤いこと、人情がいたって穏やかであることなどが記されている。おもしろいのは集落ごとの人情についても述べているところで、役場のある鳩谷は上品で、木谷は愚直などと記されている。「風俗画報」も「飛騨の白川」も、二十三个村からなる「白川郷」全体について述べており、大きな白川郷のなかの場所による特色についても触れていることから、現在の「荻町」のみに集中した「白川郷」のイメージとはかなり

異なるものであることがわかる。

これらの風俗紹介に代表されるように、奇異、奇態、エキゾチック、古代の遺風など、明治から昭和三十年代にかけて白川村は山奥の一風変わったところというイメージで語られることが多かった。「大家族」以外の根拠として、ごく多分にもれず白川村にも平家の落人伝説がある。富田は「風俗・言語・動作など極めて古典的で雅趣のあるのは珍とすべく、平家の落人説を唱へて居るのもこのため、中には現に當年の平家の赤旗を襲藏して居る家もあるさうである」と述べている。「風俗画報」にも取り上げられていた「紋のついた着物で農作業をしている」ということのほかに、言葉遣いが雅で丁寧だとか、所作がどことなくおっとりしているなど、似たような「平家の落人説」が他の記事にも繰り返し登場する。結果的にはこの落人説も先述の大鶴が「服装と平家の落人の関係については同じような服装は他の地域にも見られるから、その言い伝えはあまり信じることができない」と述べているように、民俗学、社会学など各方面からやんわりと否定されている。しかし、一般向けとしては「平家の落人の子孫が誰も知らない山奥で唄れ着を着て農作業をしている」という構図が魅力的なイメージとしてとらえられたのであろう。そもそも白川村がさかんに取り上げられるようになったのは先に述べたように「大家族」と大きな合掌造りの建物が人々の目に「奇妙なもの」に映ったからである。このまなざしは好奇の目であると同時に未開の異国を覗き見るような（エキゾチックということばはまさに「外国趣味の」という意味だが）優越感が潜在しているとも言える。たとえば近藤は次のように述べている。

只憾むらくは吾々莊白川方面の純朴粗野天使の如き風俗をカメラに納めたかつたのが如何なる理由か土地の老幼共に許されなかった。寿命でも縮むものとも思つたのか。¹³

このエキゾチシズムは現在でもよく理解できるもので、さまざま「知られざる地域」への探検や興味がその後日本から世界に広がっただけである。「知らない場所」がメディアを通じて世間に「知られる場所」となれば、また次の新たな知らない場所をさがしてその興味は尽きることがない。逆に言えば、この時代には日本国内に「異国」とも思える場所が存在し得た、それが白川村だったということなのである。

白川村ではこの「奇妙なもの」というイメージは「大家族」制度そのものの消滅と共に昭和二十年代を最後にほぼ消える。昭和二十一年の新聞には「崩れゆく白川村 揺らぐ家長の權威 大家族村に時代の息吹き」という見出しの記事が掲載された。¹⁴新しい憲法の公布、新しい民法の制定によってそれまで権力を維持していた「大家族」の戸主も子供達の分家を認めざるを得ず、財産分与も「もはや戸主の独占など許されない」と「大家族」の崩壊の様子を伝えている。「大家族」そのものがなくなってしまったこと、研究によって「大家族」が決して奇妙なものでないことが明らかにされたことに加え、生活の近代化によって、実態がなくなってしまったことがこのイメージが消える直接の原因であると考えられる。

合掌造りの建物が主役となった今日では「大家族」に関する情報を白川村で目にする機会はほとん

どないが、それでも時々「大家族の合掌造り」という説明を耳にすることがある。大きな建物の説明材料として「大家族」というのはわかりやすい。もともと「大家族」は荻町にはなかったので、「大家族」を「合掌造り」と簡単に結び付けてしまうことに対して苦言を呈する専門家もいるが、白川村研究は「大家族」から始まって合掌造りの建物へと展開したことや「大家族」研究をめぐる騒動のことを考えると、もう少しどこかで「大家族」にまつわるさまざまなものがたりを提供してもよいのではないかとも思うのである。

4 まなざしに翻弄された「大家族」の遠山家

旧遠山家民俗館は萩町から車で南に二十分ほどの御母衣みぼろという集落にある大きな合掌造りの建物である。遠山家のパンフレットの写真を見ていただきたい(図1-4)。合掌造りの建物の前に当時遠山家に暮らしていた「大家族」が整列している。実はこれと全く同じ写真が経済学者福田徳三の著作に「飛騨國白川村大家族の圖」として掲載されている。

福田徳三の『國民經濟講話』は経済とは何か、労働とは、生産とは何かという経済の原論について事例を用いながら説明した全千四百十二頁の大作である。これが一体遠山家とどのような繋がりがあろうか。遠山家を取り上げられているのは「國民經濟の成立」の章で、ここでは原始時代からの婚姻の変化について述べられており、「昔の家族状態に餘程似ている」特徴的な一例として遠山家が説明されている。当時の「大家族」制のもとでは家長が大きな権力を持っていて、その采配のもとに家人が働き、報酬として食べ物や寝る場所を与えられていて、これは「資本制以上の労働掠奪」なのだ、という衝撃の記述が見られる。この点について福田は「マルクスの所謂労働掠奪は決して資本制生産社会に於てのみ、資本家のみによつて行はれるものではなく、此の如き幼稚なる生活をして居る大家族中に於ても行はれ居るのです。否、資本の掠奪よりも遙に徹底的に掠奪するのです。マルクスの掠奪説の誤謬なることの絶好の一例としても白川の大家族は興味の深いものであります」とし、なぜこれまで遠山家を訪れた学者たちがそれに気がつかなかったのか、と語気を強めている。「幼稚

旧遠山家民俗館

国指定重要文化財



クラシック路なり白川郷
エキゾチック道なり飛騨國



図 1-4 遠山家パンフレット



図 1-5 現在の遠山家（平成 19 年）

な生活」をしている家族でさえも、資本制の掠奪以上の掠奪が見られるぞ、とマルクスに反論しているのである。これを書くにあたって、大正七年（一九一八）福田は遠山家に一泊し、長瀬や平瀬にも行き「成程餘程變つた風俗の行はれて居る處です」と感想をもらしている。ちなみに、このときの福田の白川村訪問の様子について柿崎は次のように述べている。

白川村入りする研究者の中には、村の人がそれまで見たこともなかったような人力車に乗り、沿道の見物人たちをよそ目に高山町から白川入りする（大正六年、福田徳三のこと）など、村人たちにとって、白川村を訪れる研究者やジャーナリストは雲の上の人種のように映っていた。^四

当時福田を迎えた遠山家の人々も、まさか自分たちがマルクスへの反論の材料にされているとは知るよしもなかったに違いない。

実は、かの柳田國男も遠山家を訪れており、そのときの様子を明治四十二年（一九〇九）に「木曾より五箇山へ」という短文に残している。^四 遠山家で休憩をした柳田は、その「大家族」について「有名な話となりをれども、必ずしも特殊の家族制には非ざるべし」としている。さらに、「狭き谷の底にて娶らぬ男と嫁がぬ女と相呼ばい静かに遊ぶ態は、極めてクラシクなりと言ふべきか」と、哀切な語り口で「妻どい婚」について感想を述べている。この「クラシク」という言葉が現在のパンフレットにも引用されているものであろう。福田と柳田を比較すると、十年を隔てずに同じ場所を訪れてこれほどまでに感想や印象が異なるのもおもしろい。同じ「遠山家」を見ているのに、それぞれ

の社会的立場や使命によって目に映るものはバラバラであるという好例である。

その後遠山家は「大家族」研究の盛り上がった一九三〇年代～一九五〇年代、最も多くの文献で紹介され、写真の掲載も他の合掌造りの建物に比べ圧倒的に多い。福田の著作以来遠山家は「大家族の標本の様に喧傳せられてきて、都市の新聞雑誌に紹介される写真は殆ど凡てこの家である」と言われたほどで、当時は「遠山家」と「大家族」が大変有名であったことがわかる。遠山家では多くの見学者に対応して絵葉書などを販売するようになるが、あまりにも見物客が次々に訪れるために、「当内部の観覧は甚迷惑につき誰人にも固く御断り致します 遠山家」という札が立ったこともあった。そのような紆余曲折がありながらも、半世紀以上もの間外部からの視線にさらされ続けた結果として、昭和四十二年には民俗館としてオープンし、同四十四年には県の、四十六年には国の重要文化財に指定された。こうした流れのなかで、遠山家を訪れた人々は学術的な感想とは別に、たとえば、昭和十一年に遠山家で絵葉書やスタンプが売られているのを見た建築史家、藤島亥治郎はその商売つ氣に「驚きもし、嘆かしくも思う」と述べ、また昭和五十二年に民俗資料館となった旧遠山家を訪れた地理学者、市川健夫は「生活のない民家に入っても、往時訪れた時にはあった人間のぬくもりをまったく感じる事ができなかった」としている。これは、それぞれに刷り込まれたイメージを抱いた訪問者のある意味では「身勝手」ともいえるのである。今では白川村の中で「大家族」についての資料を見学できるのは遠山家のみであるが、平成十二年ころまでは二万人前後を推移していた入場者数も、平成十六年には九千人と半数以下になってしまった(図1-6)。

現在、世界遺産の荻町が注目を集めるなか、遠山家の観光資源としての扱われ方もあいまいになっ

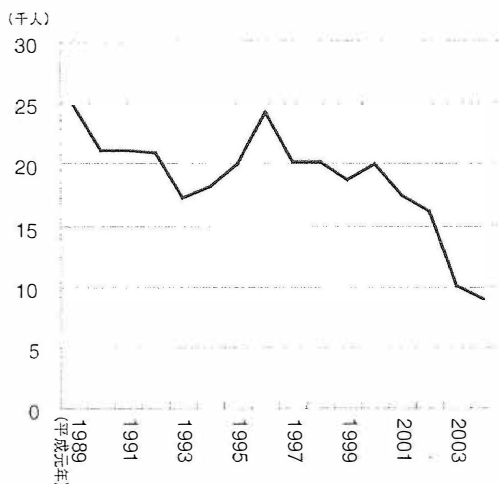


図 1-6 遠山家への入り込みの推移（白川村教育委員会データより）

てきている。旅行ガイドブックでは平成五年前ころまでは「荻町合掌集落」と「遠山家」は同格の扱い、もしくは「遠山家」のみが白川郷のなかに紹介されているものもあった。しかし、平成十二年以降は遠山家について紹介さえしていないものが三割あり、遠山家の観光資源としての位置付けが揺らいでいるようすがわかる。遠山家はかつて「大家族の家」として知らぬものはない存在であったし、そのおかげで合掌造りの建物も広く世間に知られるようになったともいえる。しかし、「大家族」が忘れられ、合掌造りの建物だけが世界遺産として注目されるようになった今日、荻町から離れた場所にボツンと建っている遠山家はその存在が薄れてしまっていることも事実である。多くの研究者を暖かく迎え入れ続けた結果として、民俗館としての公開の道を歩むことになった遠山家はまなざしに翻弄された白川村を体現しているともいえるだろう。

5 合掌造りの建物——民家研究のはじまり

マタダテと天地根元造り

はじめは「大家族」紹介の一部として取り上げられていた合掌造りの建物も、白川村の風俗が一般に異なっているかを探そうという「奇異なものに対する興味と驚きのまなざし」から研究がスタートしたことはすでに述べた。「奇妙なものがある」という報告から始まって、詳細な調査に基づく客観的な論拠で徐々に修正されていったのが「大家族」の研究であったが、合掌造りの建物の研究の導入部として、「マタダテ」論争も同じように興味と驚きから客観的な把握へと深められた例としてあげることができる。「マタダテ」とは図1-7のように合掌の屋根部分のみが直接地面から建っているもので、これが「天地根元宮造り」という原始形態がそのまま残っているものか否かについて、民俗学の研究者をも巻き込んだ論争が展開された。確かに合掌造りの屋根の部分のみが地面から立ち上がっているこの「マタダテ」は、人間の原始時代からの住居だと言われればそんな気もするほど素朴で力強い印象である。

はじめて「マタダテ」の記述が現れたのは明治四十二年（一九〇九）の農村調査で「稀には柱を建てず、地上に合掌を組み、眞茅を葺き居住するものあり。何れも古代の遺風なるべし」と図入りで紹介されている（図1-8）。「風俗画報」の記事の下敷きとなったこの岐阜県農会による調査は「古代の遺風」を見つけようという関心に満ちているが、この農村調査を下敷きに「古代遺風」のまなざし



図 1-7 マタダテ

荻町の世界遺産地区で一棟だけ見ることができる（平成 14 年）

を極力排除して書かれたと思われる大正十一年（一九二二）の農家住宅調査^④では、「マタダテ」に関する記述はないもののその間取り図が示されている。建築研究の分野で最も早い大正十二年（一九二三）に論文を発表している竹内芳太郎は、合掌造りの建物の成立を推測する材料としてこの屋根だけの合掌造り、俗称「山小屋式の家」について全十二頁中三頁あまりを割いて詳述している^⑤。このなかで竹内は保木脇という集落にあるこの建物が現在の合掌造りの建物の原型ではないかと推測し、さらに、四国にある家の間取りと似ていることから、「平氏の落武者の村だといふことを裏書するものであるかもしれない」と述べている。一方で、下の「梁」にあたる部分があるので、「マタダテ」が「天地根元宮造り」ではないと断じている。

図 1-8 「農村白川村」

上は「古代遺風の家屋」としてマタダテが、下は「近代の家屋」として合掌造りの建物が掲載されている。「岐阜県農会雑誌」岐阜県農会より（明治 42 年）

この「マタダテ」で注目されていたのは当初、保木脇の岩下家のことであり、岩下家はその後も繰り返し写真と共に論文や書籍に登場した。昭和二十年前後には「天地根元宮造りである」とする藤原義一⁴⁴に加え江馬三枝子⁴⁵ら民俗学の研究者も竹内に反論する形で「マタダテ」論争に参戦している。藤原は『日本住宅史』のはじめに日本の初期のころの住宅や神殿の形式を「天地根元宮造り」であるとし、それを暗示する好例として五箇山や白川村の「マタダテ」をあげている。一方、江馬は自らの木谷での詳細なフィールドワークをもとに、マタダテについて述べている。白川村の中切の木谷という集落では明治二十年（一八八七）、大正十三年（一九二四）の二回、七戸中

六戸が焼ける火事が起きた。最初の火災のときには火災のあと一週間たらずで四棟の「マタダテ」が村中の協力によって立てられ、二度目も同様でかなりの期間六戸の家族が「マタダテ」に住んでいたのだという。こうした事実に加えて、江馬は竹内の指摘した「梁」のある「マタダテ」はひとつの変形にすぎず、白川本来の「マタダテ」は合掌材を土に埋め込む掘立て式であったと反論している。

こうした議論の間、富山県の五箇山にも「マタダテ」が発見されているが、当の保木脇の家屋は「他所から見物人が珍しさうに見に来るので家人が厭がつてとうとう普通の家に改造してしまった」らしい。昭和三十一年には城戸久がそれまでの「マタダテ」論争を整理し、原型農家（合掌寄棟）↓差掛窓付合掌寄棟↓合掌入母屋↓ハシラダテ（合掌切妻）↓「マタダテ」（合掌切妻）の順に庄川上流の建物が発達したのではないかと推論を行っているがこれを最後に「マタダテ」に関する研究は見られなくなった。現在、荻町の合掌造り民家園では「マタダテ」が復元されており、それに関して宮澤智士は「別名ナンマイダブツ小屋といい（中略）災害などで家を失ったときに、復旧するまでの仮住まいとして、数十年前までは白川郷でも建てられていた」こと、合掌造りの建物は天地根元宮造りから発展したものではなく、「現在見られるような切妻の合掌の小屋組は地元で考案された」ものであると述べている。実は荻町の世界遺産地区内の北の端、牛首川沿いにも現役の「マタダテ」があまり人目につかないところにひっそりと一棟建っている（図1-7）。現在は倉庫に使用されているようだが建築年代は不詳である。



図 1-9 修理を終えたばかりの和田家便所
国の重要文化財に指定されている（平成 19 年）

便所奇譚

白川村の建物の話でマタダテほどではないが、もうひとつよく話題にのぼっていたのが「便所」である。巨大な合掌造りの建物の紹介では、その間取り、囲炉裏の様子などといかならず便所について触れられている。便所は主屋から少し離れたところであり、間口三間、奥行き一間三尺から二間という大きな建物を板壁でふたつに区切ったもので、床に穴が空いており、その上に長い板が二本渡されていた。この大きな便所は「ヘンチャ」「ベンジャ」と呼ばれ、冬の間「デングリ返し」と呼ばれるかきまぜ作業を経てためられた排泄物は、良い肥料となつて春に田畑に撒かれたことである。

高木正義はこの便所について「数人一時に用を達するを得べし、而してその間に仕切り

の設けなし、是れ最も蛮風の甚しきものなり」と決めつけているが、そうではなく一人ずつ使うのだとその後まもなく否定されている。高木は白川村が奇妙なところだと頭から決めてかかっているので、大勢が一緒に用を足すなどという発想が出てきたものだろう。この便所では今でいうトイレットペーパーの代わりに藁を使用していたが、これについて大鶴がおもしろいエピソードを紹介している。東京から白川に來た客が、便所に綺麗に切りそろえてある藁を見て、大便の上にかけるのだと思いい用を足すたびにたくさん振りまいていたら、たちまちにして藁がなくなってしまった。それを見た家の主婦が「これは能登から取り寄せた切藁で塵紙代わりに使うものだ」と咎めたため、大いに謝ったという話である。実は今でも白川に行くと「昔は藁をよう揉んでやわらかくしてふいとったんや。結構痛かった」という話を聞くことがあるが、当時の様子は唯一遺されている荻町の和田家の便所を見ながら想像するしかない。和田家の便所は平成十八年に修理工事が終わったばかりである。国指定の重要文化財なのでもちろん実際に使用することはできず、大切に保護されている。

6 観光資源の元祖——白水瀧

白川村の観光資源の変化

「自然の風景を見る」というのは、現在に至るまで旅行先での行動の中で一貫して上位を占め続けている。一般に、「見る」対象としての風景にはこれまで大きな転換期が二回あったとされている。一回目は従来の史跡や名勝といったものに加えて自然風景が「発見」された明治期で、松島や天橋立といったいわゆる江戸時代以前から「名所」と呼ばれていたようなところから、日本アルプスのような雄大で時には荒々しい自然の風景へと広がった。二回目は昭和四十年代の旧国鉄のデイスカパー ज्याパンキャンペーンで、その対象が「自然風景」から「まちなみ」や「農村」などの「生活風景」へと大きく転換したと言われている。今でこそ「世界遺産」という大きな冠をもらっている白川村も、このような社会の流れに乗って、一般の人々に向けたガイドブックなどに紹介されている見どころは戦前と戦後で大きく変化した。

白川村にはすでに述べたように世の中から注目される「大家族」という大きな要素があったが、それ以外にも、多くの見どころが古くから取り上げられてきた。これらの白川村の「観光スポット」について少し紹介してみよう。明治期から今日まで、ガイドブックなどで紹介されている白川村の資源は名所旧蹟、自然資源、その他の三種類に分けることができる。名所旧蹟としては昔の城が地崩れによって埋もれてしまった跡が残っている^{かえりぐもしやう}帰雲城や荻町城趾、嘉念坊道場跡などがある。帰雲城は山



図 1-10 帰雲城跡

後ろに見えるのが地震による崩落の跡と言われている（平成 19 年）

に大きな地崩れ跡が白々と見えている場所で、その下にたくさんさんの財宝が埋まっているのではないかといいまことしやかな噂があるが、真相は謎に包まれたままだ（図 1-10）。荻町城跡については別の項で詳しく述べるが（七十九頁）、今は展望台となっている場所である。嘉念坊道場跡は荻町のすぐ隣の鳩谷集落にあり、飛騨地方に浄土真宗を広めた嘉念坊善俊の碑が建っている。自然資源としては、大白川温泉、白水瀧、白山があげられる。大白川温泉は以前から白山登山者に有名で、現在でも素朴な露天風呂を楽しむことができ、地元の人には「子宝の湯」としても知られている。さらに、すでになくなってしまったものとして籠の渡しがある。白川村の南北を庄川が貫いているが、江戸時代から明治の初めまではこの川を渡るのに蔓で編んだ籠にのってロープを手繰って渡っていたというものである。『斐太後風土記』によると、庄川には当時五箇所の籠の渡しがあり、荻

図 1-11 籠の渡

「農村白川村」岐阜県農会雑誌、岐阜県農会より（明治 42 年）

町にあった最も長いものは五十六間と百メートル近くあったようだ（図 1-11）。その他の資源としては合掌造りの建物や御母衣^{みほろ}ダムがあげられる。

これらの観光資源が一般向けに白川村の紹介が書かれている書籍四十三冊のなかでどれくらい紹介されているのかその数を見ると、戦前と戦後では大きな違いが見られる（表 1-1）。戦前には帰雲城、嘉念坊、白水の瀧が半数以上の文献に紹介されており、籠の渡し、荻町城趾が三十%台とこれに続いている。戦後はこれが逆転し、荻町を中心とした合掌造りの建物が戦前の二十六%から七十%へと大きく増加し、次いで御母衣ダムが約六割となっている一方で、白水の瀧は二十五%、帰雲城十七%、嘉念坊十七%と掲載される割合はいずれも激減している。つまり、名所旧蹟や自然資源から合掌造りの建物へと、世の中の

表 1-1 紹介されている観光資源の変遷

	資料総数	自然資源		人文資源												無形資源				
		白水の瀧	白山	大白山温泉	綿雲城	史跡 嘉念坊	萩町城跡	古閑址 (番所跡)	建造物 合掌造りの建物	有形資源 建造物および 民家園	遠山家	群 御母衣ダム	世界遺産 (白川郷の合掌造り集落)	その他 龍の渡し	その他	大家族	こだいじん (民謡)	白川輪島 (民謡)	どぶろく祭り	白良弓 (力士)
～1910代	13	4	1	3	5	4	3	2	3	—	0	—	—	4	3	5	0	0	1	2
		31	7.7	23	38	31	23	15	23	—	0	—	—	31	23	38	0	0	7.7	15
1920～40代	6	6	3	4	6	6	3	0	2	—	2	—	—	3	3	6	1	1	1	3
		100	50	67	100	100	50	0	33	—	33	—	—	50	50	100	17	17	17	50
1950～60代	8	1	2	1	1	2	1	0	6	—	1	—	5	1	1	6	4	1	1	1
		13	25	13	13	25	13	0	75	—	13	—	63	13	13	75	50	13	13	13
1970～	16	5	5	4	3	2	0	0	11	6	6	3	9	0	0	5	6	0	6	0
		31	31	25	19	13	0	0	69	38	38	18.8	56	0	0	31	38	0	38	0
計	43	16	11	12	15	14	7	2	22	6	9	3	14	8	7	22	11	2	9	6

上段：総数、下段：％ ※1940年代は資料なし

流れと共に白川村で注目されるものも変化していることがわかるのである。

那智にも負けない白水の瀧

これらの観光資源の中でも、戦前型の自然資源の代表である白水の瀧について少し詳しく取り上げてみたい。白水の瀧と大白山温泉は現在の白川国立公園の中にある。いずれも明治六年（二八七三）に書かれた『斐太後風土記』に登場しており、「大家族」や合掌造りの建物がまだ取り上げられていない時期からすでに名所として紹介されていた。同じ『斐太後風土記』に所収されている白川村に関する最も古い紀行文のひとつである天保十二年（一八四一）に書かれた「山分衣」の著者は、白水の瀧を見て大白山温泉を往復するというルートをとっており、瀧について次のような感想が述べられている。

ひたしろに白く、おもしろきこと、世に又有るべしとも覺えず。いみじき絵師といふとも、まさにかうは寫し得てんや。(中略) 時うつるまでながめあつれど、あくべうもあらず、いまはとてゆかんとしつるが、猶ふり捨てがたくて、²⁰⁾

どんな絵師でもこうは描けまい、時の過ぎるのを忘れて眺めてしまうほど、白く美しいと感激している。『斐太後風土記』によれば、そもそも「白川」の名の由来は白山を水源とした大白川が白水の瀧となって流れ落ち、その水の色がいつも濁って白く見えること、その大白川の水が流域の村々に行き渡るために「白川郷」というのであらうとされている。そのほかにも、明治三十四年(一九〇二)の『岐阜県案内』²¹⁾では白水の瀧の壮観は那智や華嚴の比ではない、という絶賛ぶりである。ちなみに、『斐太後風土記』も『岐阜県案内』も合掌造りの建物についてはまったく触れていない。この時期には合掌造りの建物は今よりももっとたくさんあったはずだが、一般向けの紹介という意味では全く興味の対象として考えられていなかったのである。

さらに、時代をずっとくだって昭和三十四年の雑誌「旅」には次のように紹介されている。

田村剛博士は那智、華嚴とならんで日本三名瀧の一にかぞえたが辻村太郎博士はこれこそ日本一と訂正したものだ。²²⁾

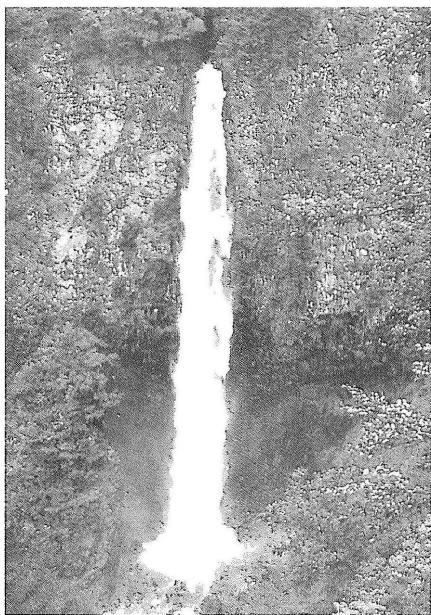


図 1-12 白水の瀧 (平成 14 年)

田村剛は「国立公園の父」とも言われ、国立公園制度をつくり上げ、指定のために全国を視察してまわった人物、辻村太郎は昭和初期に「景観地理学」をはじめに唱えた地理学者で、いずれも「風景」の分野では超級の大物である。この超大物たちが手放しで絶賛していたというのが本当ならば、これはすごいことで、滝のなかではかなり注目されていたものである。

このように白水の瀧は観光資源としては最も古いものだが、現在も当時と全く変わらない姿をしている(図1-12)。白水の瀧から流れる川の水は白というよりは独特のエメラルド色をしていて大変美しい。平瀬という集落から大白川温泉に向かう山道を少しそれて滝を見るために整備された簡素な展

望台に行くと、まさに江戸時代と同じ姿をした滝を見ることが出来る。実は見た目ではわからないが以前と異なっている点が一つだけある。昭和三十六年、この滝の上流部に大白川ダム（白水湖）がつけられたため、滝の水量が減ってしまい、現在はバルブで水量を調節しているということである。

その後観光資源としての「白水の瀧」はどくなったのか。明治期には滝そのものが名所として白山とは別に単独で紹介されているが、その後、徐々に白山の一部として扱われるようになった。これは白山が昭和三十年には国定公園に、昭和三十七年には国立公園に指定され、白水の瀧よりもむしろ白山の名前が広まったことにもよる。つまり、「滝」という資源の位置付けが、名所から自然風景の一部へと移り変わったことで「白山」に吸収されたと考えられるのである。現在では地元の小中学生の遠足などで利用されているし、おそらく年間百五十万人いるとされる（環境省調べ）白山登山者の一部も訪れてはいるだろうが、白川村の中だけを考えると、「世界遺産」のビッグネームの影に隠れてしまった感はないのである。合掌造りの建物や集落が大きく注目され始めるに従って白水の瀧の観光資源としての位置付けは相対的に縮小されたのは残念なことともいえるが、一方では贅沢な話ともいえ、白川村が多様で豊富な観光資源を抱えているからこそ、こうした盛衰が明らかになるというわけである。

7 白川村の「典型的」な集落だった保木脇^{ほきわき}

これまで、「大家族」やそれにまつわる風俗、マタダテあるいは滝といったものが明治から昭和の初期にかけて注目を集めていたことを述べてきた。一方で、現在「白川郷」として注目を集めているのは荻町の集落で世界遺産にも「白川郷・五箇山の合掌造り集落」という名前で登録されている。荻町の集落は写真からもわかるように、河岸段丘の平地に大中小の合掌造りの建物が庄川に沿ってなかなか弧を描きつつ、同じ方向を向いて並んでいるところに特徴がある。

はじめに述べたように、江戸時代には「白川郷」というのは現在の荘川村、白川村、清見村の一部の合計四十二ヶ村のことであり、白川村の二十三ヶ村は南から中切七集落、大郷十集落、山家六集落、の三つの地域に分かれていた。河岸段丘の比較的広い平地にある大郷に比べ山の斜面に少数の家屋が点在する中切や山家では、昭和初期までは田をつくることができず焼畑がさかで、主食もヒエなどに頼ることがほとんどであった。また、「大家族制」があったのも中切と山家の一部の地区のみだった。現在でもたとえば中切の人は高山へ買い物に出るが、大郷や山家の人は富山方面に行くなど、生活圈も少し違っている。つまり、同じ「白川郷」でもその特徴は集落の立地によって異なる点も多いのである。

実は荻町が「白川郷の集落」として注目され始めたのは昭和の終わりになってからで、それまでは南の中切地区や北の山家地区のほうが大きく取り上げられていた。今回集めた資料によると、はじめ



図 1-13 保木脇の集落（年代不詳、白川村役場所蔵資料）

て「集落」としてその景観の特徴が述べられているのは藤島が昭和十一年、十二年に雑誌「建築知識」に載せた紀行文である。このなかで集落景観については次のような感想が出てくる。

俄然眼下に緩傾斜面が開けて部落が一眸の中に展開する。保木脇である。合掌造りの大屋根が三戸、石置葺が一戸、前後に附属の倉庫が数棟、其の間を田畑が不規則に仕切られて居る。典型的な部落形態だ。

一方荻町に関しては

特に荻町は南北約八町の間南北の往還を中心として左右に数十の民家が散在して密集部落の代表者とされる。（中略）實際簡明な合掌造が西又は東に往還に均しく向きをそろへて羅列する様は大波小波の寄せる

如き壯観である。^(四)

と述べている。ここでは保木脇が「典型的」、萩町は「密集部落の代表」とされている。これは藤島だけの感想というわけではないことは、大正十二年（一九二三）の竹内の文章からも明らかである。

鳩ヶ谷や萩町などをのぞいては街道筋に並んで家が建てられてゐたり、屋敷から屋敷へと續いてゐる様な所は少ない。^(四)

ここでも、鳩ヶ谷や萩町のような場所が白川村では例外的なものとして扱われている。また、このなかで、いわゆる「景観の特徴」に言及した内容として、建物の周囲に屋敷林がないこと、莊川から尾神までは石垣の上に建物の敷地をつくっているが、その他の大部分では道路と同レベルに家屋が建っていること、などをあげている。

この時期に「集落」の写真として掲載されているのはほぼすべてが、保木脇である。いずれも同じアングルから撮影されているものが多く、撮影スポットが存在していたようである。保木脇は昭和三十年鳩ヶ谷ダム建設のために移転し、現在は昔とは違う場所に家屋が建っているため、ダムに沈んだかつての集落の様子を見ることはできない。また、保木脇の他には平瀬（現在の平瀬上村地区）、木谷といった小さな規模の集落が「典型的」とされており、総説や地誌などの白川村紹介や紀行文でも萩町に関しては、飯島や鳩ヶ谷と共に白川村の中心地で建物も多いなどとコメントされるのみで、集落と

して撮影対象にはなっていない。

このような白川村内の集落景観の地域性について、建築史家、稲垣榮三が次のように整理している。稲垣は白川村全域の民家調査を行い、合掌造りの建物の研究に大きな一石を投じた人物である。

中切地方においては、長瀬・稗田・木谷などが特にそうであるように、いずれも巨大な家屋が軒を接して建ち並び、それがいかにもこの天地の幽僻と不思議な調和を示しているのに対して、大郷地方では、荻町などその最も好例だが、比較的広い平地に大小さまざまな三角形の屋根が少しばかり行儀の悪い形に配列されていて、このような違いが直ちに村の基本的な性格の反映であることが極めて自然に想いおこされてくる。^四

後に詳しく述べるが、この稲垣の調査をきっかけに保木脇のある中切から北の山家へと対象は移っていくことになる。ここで「少しばかり行儀の悪い形」に建物が並んでいるとされている荻町は、保存運動の結果、「合掌造り集落」の代表となったのは必然ともいえるが、かつてはむしろ保木脇などの中小規模の集落が「典型的」とされていたことはあまり知られていない。世が世なら、この保木脇が世界遺産になっていた可能性は十分にあったはずである。

少し話がそれるが、稲垣の調査によって注目されるようになった山家地区には有家ヶ原がはらと芦倉あしくらという二つの小さな集落が川沿いに並んでいる。有家ヶ原が三軒、芦倉は四軒（のちに五軒になり現在は二軒）の家が江戸時代から現在まで変わらずにある。「集落景観」という点で考えると、合掌造りの

家屋こそ今ではないが、小さな集落の中の家屋の並び方、道などの構造はほぼ同じであろうと推測される。有家ヶ原の三軒はソラ家、キタ家、シタニ家で、シタニ家の屋号が「孫助」であることから、「そろきた、まごすけ！」と言うのだと村の人が教えてくれた。「孫助」さんの家は合掌造りの屋根はないものの漆塗りの立派な軸部（柱や梁、建具）が残っている。国道をバスで行くと庄川の対岸の山間にこの二つの集落がひっそりと隠れているのが見えるが、本来の「白川郷」の姿は萩町よりもむしろこの二つの集落にこそ受け継がれているのではないかと感じることもある。

8 悲しみのイメージ——ドラマチックな加須良

大家族の項で述べたような一種の「奇妙なもの」を見るまなざしに替わって現れたのは「悲愴感」あるいは「生活の厳しさ」というイメージである。ここには哀惜の念、あるいはドラマチックな現実に対する感傷が込められている。たとえば小山隆が「何よりも強く心打たれたものは、この美しい峡間に住む人たちの生活の厳しさであった」と述べたように、白川村に対する「悲しみ」「厳しい生活」といった言葉は昭和二十年代の終わりから四十年代のはじめにかけて登場する。こうした感想の背景にはダム建設による合掌造りの建物の水没や消失、加須良の集団離村がある。大規模開発による環境破壊が取りざたされる社会状況の中で、これらが新聞などで大きく報道されたことが引き金になって生じたイメージである。

このドラマチックなイメージを最も端的に表しているのが「岩波写真文庫」の記述である。「岩波写真文庫」はA5判の薄い小冊子で、写真を中心に国内外の土地の紹介から趣味、社会思想など多岐にわたるテーマと共に三百冊あまりが刊行されている。白川村が載っているのは一〇六号の『飛騨・高山』で、この中に「加須良の部落」と「御母衣の遠山家」の二つが紹介されている。このふたつのうち、よりドラマチックな扱いになっている「加須良」について述べてみたい。

私たちはあまりに疲れすぎた。文化とは何か、生活とは何か。それは文明にゆがめられ、魅力

図 1-14 昭和 27 年ごろの加須良

(細江光洋編著『世界遺産白川郷 幻の集落を追って 50 年』p.35 より転載)

のないすり切れたものになってしまった。だが探してみれば見つかるだろう（中略）この奥に求めたものがありはしないか。越中との國境いに加須良とよぶ原始的な部落があるという。

という書き出しで始まる文章は「山奥に隔絶された原始性と一種の悲愴感」という脚色に終始している。たとえば、「復員のトトからもらった兵隊帽に外来文化のにおいをかぐという村である」「東京のお客さん、この熊の皮はどうじゃ。大まけにして五千両でよか」という加須良の人の話で文章を締めくくっているところなど。こうした偏見とも受け取れる内容に対して、岩波写真文庫が発行されてから十一年後の昭和三十三年に高山高校の教諭である菱村正文が反論を試みている。菱村は「岩波写真文

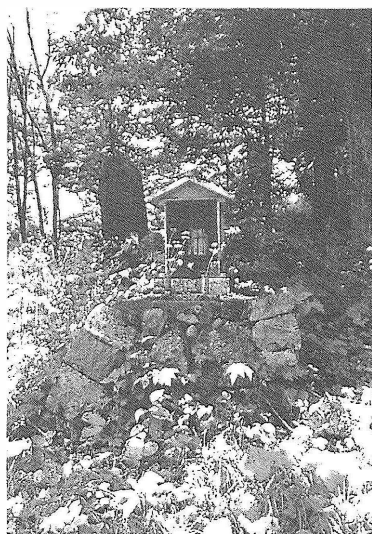


図 1-15 加須良

祠には花が添えられていた（平成 14 年）

庫」の内容を「原始部落に対する都会人的エリート、女学生的感傷」とし、掲載写真についても「『ひどいところばかり写して行ったものです』と部落の人は苦笑していた¹⁵⁾と述べている。

同じ時期の加須良の様子を異なる視点から描いたものに海野金一郎の『飛騨の夜明け』がある。飛騨地方を中心に多くの山間部の農村を診療してまわった医師海野自身の「診療記」で、体験に基づいた加須良での様子が鮮やかに描かれている。海野は昭和十八年に加須良を訪れたときの人々の欲待や、四歳で死んだ女の子を医者¹⁶⁾の死亡診断書がないために幾日も葬ることができなかった様子などを淡々と書き綴っている。実体験に基づくドキュメンタリーだけにその重みは岩波のものと比べようもないが、よそものの目から地理的に孤立した集落の

厳しさを描いているという点では共通している。

加須良は昭和四十二年に集団離村を決め廃村になる。昭和四十三年の朝日新聞には加須良が集団離村を決めたことが倒壊してしまった合掌造りの建物の写真と共に大きく掲載された。¹³⁴この記事は「かけ声だけの『保存、保存』ではどうにもならない」と締めくくっているが、こうした集団離村の報道によって「悲しみの加須良」のイメージはますます定着することになった。菱村が指摘した岩波写真文庫のようなエリートの意識は「大家族」を太古の遺風とするまなざしにも共通している。しかし、ニュアンスとしては「太古の遺風」にみる異文化を覗き見るようなものとは異なり、同じ文化の集団の高いところから哀惜、憐憫を投げかけているようにも感じられる。加えて、このような集団離村やダム建設による集落の水没の報道が、合掌造りの建物の保存のひきがねとなり、それがさらに荻町集落をまもる動きへと繋がったことは事実で、ドラマチックな報道が一役買ったともいえる。加須良の合掌造りの建物のうち三棟は荻町にある「合掌造り民家園」に移築され、公開されている。¹³⁵現在加須良に行くと、川沿いに集落の跡を見ることができ、草むらの中に合掌造りの基礎の石や大きなナラカシワの木が残っていて、その合間には畑がつくられている。加須良の人々は今でも畑をしに来ているのだという。いまだにお花を供えられた祠のたたずまいは、加須良にふさわしいドラマチックな感傷を誘うのである（図1-15）。

9 文化財指定をめぐる状況と集落景観——芦倉から荻町へ

合掌造りの建物が激減し大きく報道されたのと時期を同じくして、昭和二十五年文化財保護法が誕生した。西村が「歴史的環境保全の仕組みは文化財保護の側面から振り返ると、いかに文化財が『民主化』していったかという視点でとらえることができる」としているように、その後、単体の建造物から伝統的建造物群保存地区などの「歴史的環境」へと文化財は保護の対象をひろげていくことになる。文化財保護法制定四年後の昭和二十九年に岐阜県文化財協会が発行した「濃飛の文化財」に掲載されている「文化財」で、白川村のものは「飛驒白川郷」「白川郷の民家」「白川古大盡こだいじん」の三つである。「白川郷の民家」には芦倉の写真が掲載されている。集落の項で述べたように、芦倉は白川村の北部、山家と呼ばれる地域に属しており、実は合掌造りの集落が保存対象として注目され始めたころは荻町よりも芦倉のほうが脚光を浴びていたのである。こうした事実も含め、ここでは建築史および民家研究の延長として合掌造りの建物が文化財として指定されるに至る状況について述べたい。

文化財指定以前の合掌造りの建物の研究

「白川村研究のはじまり」では、大家族から始まった白川村の研究が民家研究へと発展する兆しをみせていたことについて触れた。文化財の話に入る前に合掌造りの建物の研究について少し時代をさかのぼってみたい。民家研究は大正時代に始まっているが、戦前と戦後では大きな隔りがある。太



図 1-16 芦倉の集落（昭和 31 年ごろ）

（細江光洋編著『世界遺産白川郷 幻の集落を追って 50 年』郷土出版社 p.41 より転載）

田は戦前の民家研究に関して次のように述べている。⁶⁴⁾

この時期の民家研究の性格は、「探訪」という言葉が示すように民俗学的な興味によったもので、趣味的な調査にとどまっていた、民俗学としてもまだ低い段階にあるものであった。（中略）報告は「どこどこの民家」といった題で、各人が見てきた民家の平面・構造・意匠を記述したものにすぎなかった。

そして、戦前の研究の例として、今和次郎⁶⁵⁾、竹内芳太郎⁶⁶⁾、藤田元春⁶⁷⁾、石原憲治⁶⁸⁾、緑草会⁶⁹⁾、あるいは機関紙「民家」等をあげている。実はここに掲げられている書籍のすべてに白川村の合掌造りの建物が掲載されており、全国的に見ても合掌造りの建物が注目を集めてい

たといふことができる。たとえば、これらのうち、昭和五年の緑草会による「民家図集」には御母衣の遠山家、荻町の和田家、明善寺庫裏など六軒の合掌造りの建物が写真、間取りのスケッチと簡単な用途の説明と共に掲載されている。現在は公開されて多くの観光客を集めている明善寺の庫裏の説明は、「柱は全部がカグラ建てで、その間隔は任意に割振られ、餘り構造的用意のない、呑気な建方である」、鳩谷の藤井家は「軒下の三角部は枝木を縦横に取付けた裏に茅簀を張込んだ原始的のもの、窓に嵌めた堅繁の障子の外は屋根といひ、羽目といひ粗笨を極めた工作である」と述べられている。「呑気な建て方」「粗笨を極めた工作」など現在の文化財としてのイメージとは随分異なる感想が述べられている。

合掌造りの建物のみに着目した民家研究では、マタダテのところで紹介した大正十二年（一九二三）竹内の論文が最も早い。竹内はその後の調査記で、当時海外にでも行くような悲壮な決意で母親の反対を押し切って「探検」に望んだことを記しており、⁽⁶⁾いかに当時の白川村が「遠い場所」であったかが伝わってくる。竹内の調査記には、有名な御母衣の遠山家に泊まらせてもらうために、「夕暮れも差し迫っているのに泊まるところがなくて困っている学生」のふりをする一芝居をうったこと、仏壇に向かつて実家で身につけていたお経を唱えたことが遠山家の人々の心をほぐし、その結果建物の隅々まで調べさせてもらえたことなどが記されている。こうした苦勞の結果、早稲田大学の卒業研究としてまとめられた論文は生活全般にわたるこまかい聞き取りとスケッチで構成されており、まさに「採訪型」の典型といふことができる。その後も、民家研究者らが次々と白川村を訪れているが、先述のマタダテ論争の他は、合掌造りの建物の外観のスケッチや写真、間取りの把握といった内容にと

どまっている。こうした「採訪型」の研究は戦後まもない昭和二十六年の稲垣栄三らを中心とした農村建築研究会による調査報告⁽⁸⁾が大きなきっかけとなって方向転換を迎えた。

稲垣以前の建築関係の研究者が白川村のどの家屋を対象として間取りの把握やスケッチを行っているかを数えてみると、対象としている家屋が明確なものは十八の文献のうち、北部の中切地区は遠山家十一件（写真九件）、保本脇岩下家（マタタテ）三件（写真四件）、中部の大郷地区は荻町明善寺庫裏四件（写真二件）、和田家二件（写真一件）となっている。つまり、ほとんどが中切地区のみを対象としており、緑草会⁽⁹⁾のものと、藤島⁽¹⁰⁾のみがわずかに荻町の写真を掲載している。大家族に端を発した合掌造りの建物に関する建築研究の対象家屋もはじめは大家族のある中切地区から外れることはほとんどなかったのである。

稲垣栄三らによる調査と「建築史研究」への展開

それでは「民俗学的興味による採訪」にすぎなかった民家研究が「建築史研究」になるためにはどのような視点が必要だったのだろうか。そもそも建築史研究とは社寺を中心に始まったものであり、建築史研究における「住宅」とは貴族や武士の住宅で、いわゆる「町家」や「民家」はまったく対象ではなかったといつてよい。建築史の分野から顧みられることのなかった「民家」はむしろ民俗学や地理学の対象としてとらえられてきた。そのため、新たに「民家」を「建築史」の対象とする場合、その「ものさし」の目盛や質は社寺や貴族住宅、武家屋敷に用いたのと同じである必要が生じる。太田によるとその方法とは、現存の民家の痕跡から編年考察を加え、平面だけでなく、平面と構造の一

体的な調査を行い、編年考察の指標とする「復元的研究」である。さらに民家研究独自の特徴として、その変化の要因を探るために民俗学的方法が欠かせないとも述べている。それまで民家に無関心だった建築史学だが、民俗学の一部として発達した民家研究に、それまで社寺に用いていた「痕跡調査」から「編年考察」の手法を持ち込むことによって、建築史に「民家」が位置付けられることになった。稲垣らによる調査は、それまでの民俗学、地理学等による民家研究とは異なり、歴史の流れに「民家」をのせるため、さらにそれまでの建築における「住宅研究」「建築史研究」に「民家」をのせるため、地域を限定して調査を試みるのが目的であった、とされており、太田のいう民家研究の方法を模索するための調査でもあったことがわかる。内容としては白川村の概要やそれまでのさまざまな分野の白川村研究を整理した後、社会経済面（農業その他土地利用）、生活面（大家族制を含む社会状況の把握、建物の間取り）、建築生産組織および技術などの項目で調査を行っている。稲垣はこの調査報告の後に同行した文化財調査の結果を踏まえて論文をまとめているが、白川村全体における近世以降の社会産業の変遷を把握し、間取りを中心とした住居形態の発展と関連付けて考察し、各集落の草葺棟数および屋根葺きのための相互扶助形態の「結い」についても詳述している。対象となったのは白川村のほぼ全域にわたる中切地区十三棟、大郷地区三十棟、山家地区六棟の計四十九棟で、合掌造りの建物の平面と用途を把握している。これらの一連の調査は民家調査として中切地区だけでなく村全体を対象として網羅しているところが特筆すべき点であるが、主に社会と建築のつながりに重点がおかれ建築構造は分析されていないという点においては太田の言う「建築史研究以前」であるともいえる。

太田は、この白川村調査を例にあげて、「戦前のものと変わらないようにみえる」としながらも、「戦前のものと違っている点は、その調査によって、その地方の民家史を組み立てようとしている点である」とその姿勢について評価している。さらに、稲垣の研究を戦後までもなくできた農村建築研究会の代表的なものである、としている。この稲垣らによる調査をきっかけに、大家族から端を発した合掌造りの建物の研究は「建築史」における民家研究として民俗学とは袂を分かつことになった。

文化財指定へ

昭和三十年代以降、稲垣らの調査をきっかけにして、白川村における民家研究の対象は「大家族」の研究で注目されていた中切地区から、白川村全域へと広がった。この背景には、ダムの建設に伴う合掌造りの建物の激減に対する世論の沸騰がある。日本全国に「開発」という圧力がかかりだした状況の中で、戦後ようやく建築史の一部として調査法や研究方法が確立しつつあった「民家」を早急に「文化財」として指定する必要がある。文化財保護をめぐる「開発」対「保護」という構図が確立したのはこの時期で、昭和四十六年に出版された『文化遺産の危機と保存運動』には、考古や歴史などの専門家によって開発に対する保存側の激烈な主張が繰り広げられている。たとえば、くだんの稲垣は次のように述べている。

「開発と保護」の提起する問題は、個々の文化財や限定された地域をいかにして開発の暴力から守るかという技術的問題の段階を、いまやこえてしまったかのようにみえる。それはまず、人

図 1-17 文化財指定に関する新聞記事

(昭和 30 年 11 月 13 日付、白川村役場所蔵資料)

間にとって自然や歴史遺産が総体としての
ような意味をもつのかを問い、人間の生命や
生活が、これらとどのようにかわり合うの
かを問い、そしてとりわけ現代の文明のあり
方について根本的な反省をうながす契機とし
て、この問題はわれわれの頭上に重くのしか
かってきたように考えられる。

白川村でも、この時期に次々と庄川の下流から
ダムが建設され、大郷地区、中切地区もその例外
ではなかった。先述の稲垣の調査に加え昭和三十
年十一月七日十二日に、当時の文化庁建造物課長
である関野克が白川村の調査を行っている。ここ
で関野が「『白川の合掌造り家屋は宮崎県椎葉村
の民家と共に双へきのものであり、五戸の文化財
指定は確実。指定期日は明春三、四月ごろ』と太
鼓判を押した」ことが新聞に掲載されている。そ
の五戸とは「比較的新しいが建築様式がしっかり

しているという代表に御母衣の遠山家、その中間くらいのものにて天保四年の建築棟札のある同部落の大戸家、古いものに長瀬部落の大塚家、芦倉部落の東家、規模の大きいものの代表に在家ヶ原部落マダラの北家」であり、荻町の建物は含まれていない。

当時の民家を文化財指定したときの状況として、太田博太郎は以下のように述べている。

どんなものが他にあるか分からないのに、指定するとすれば、社寺などと同じように、名品主義でゆくほかはない。(略) 次は九州の椎葉の民家だとか、飛騨の白川郷の民家だとか特殊の型で、その分布範囲も比較的狭いもののうちから選ぶ。(略) 要するに、ある類型の代表というよりも、社寺のような一品主義でゆくより方法がなかった。

このような視点がすなわち、先述の記事での各建物の「大きい」、「古い」といった修飾語となっていることがわかる。さらに、先の新聞記事で興味深いのが、

また東家のある芦倉集落(五戸)は合掌づくり家屋ばかりの集団部落なので将来しゅう落地帯として指定したい意向だが、指定と決れば修復に国の補助金が出るが、許可なしで修理などではきなくなり、所有者が維持困難になったときは国で買い上げることになっている。

としてのことである。川越や妻籠に端を発したとされるいわゆる町並み保存運動は、昭和三十年代

後半からとされているが、昭和三十年の時点で集落保存の考えがすでに存在していたことがわかる。さらにその対象が荻町ではなく集落のすべてが合掌造りの建物である山家地区の芦倉であったことが、この後芦倉に注目が集まるきっかけとなったことは間違いなく、昭和四十年代までの資料に掲載されている写真は芦倉に集中した。時期を同じくして昭和四十六年に荻町では「白川郷荻町集落の自然環境を守る会」が結成され、合掌造りの建物の保存へと方向を定めた。世界遺産への種がまかれたのである。

関野の昭和三十年の調査は「庄白川総合学術調査」の一部として昭和三十二年に報告書が出された。この「庄白川総合学術調査」は、文化財保護委員会の指導のもとに岐阜県教育委員会が行ったもので、「特殊な地理的条件の下に営々と生活をいとなむ人々が存在する以上、当地方をいたずらに『秘境』⁶⁵⁴或は『魔境』という名に満足させ放棄することは許されない」ことを第一の、「当地方の主要部の大半が電源開発によつて埋没する運命にさらされている」ことを第二の理由として企画されたものであった。調査内容は遺跡、美術品、芸能、地質、植物など多岐にわたっている。この調査の一項目として建築があり、関野克と伊藤延男という大物コンビが執筆している。「庄白川地方の建築について」という報告では、先の稲垣らが行った昭和二十六年の調査の他、昭和三十年の二回の補足調査を経て書かれたものである。この一連の調査では荻町においては和田家、長瀬家、佐藤家の三戸が調査対象となっているが、結果としていずれも最初の文化財候補には選ばれなかったことになる。

さらに、先に新聞記事のなかで関野があげていた五戸のうち、その後文化財に指定されたのは大戸

家、遠山家のみで、しかも大戸家を含む三戸は移築されてしまった。なぜこのような事態になったのか。この理由は昭和三十五年の新聞記事から窺い知ることができる。ここには、文化財の調査で候補に上がった十数戸のうちほとんどが「指定を受けると改築などができなくなるから」と指定を辞退し、結局大戸家のみが指定に至ったこと、しかし、「大戸さんも文化財指定を返上したいともらしている」という記事が「こわされる合掌家屋と新築中の家」という写真と共に掲載された。ここに建築史研究をもとにした文化財指定と、現実の生活とのずれが大きく生じていることがわかる。つまり、建築史からみた文化財的な価値は「民家」に住んでいるものにとってはにわかに「価値」とは認識できないものであり、価値がわからないうえに規制だけが強くなるのでは、という危惧が先に働いたのである。同じような理由からか、注目されていた芦倉でも昭和四十年代にすべての家が合掌の屋根をおろしてしまった。竹内は「建築史研究の立場から、社寺建築に対するのと同じの心構えで民家を取りあげようとしたところに、その過誤の要因がひそんでいる」としているが、こうした状況には文化財として人が生活している民家の価値を社寺と同じものさしで図ることへのひずみが現れているとも考えられるのである。

10 ブルノ・タウトの威力と「普遍性」

昭和十年五月十七日に白川村を訪れたブルノ・タウトが、合掌造りの集落を見て「これはむしろスイスか、さもなくばスイスの幻想だ」と言い、合掌造りの建物の構造的なすばらしさをゴシック建築になぞらえて絶賛したのは有名な話で、現在にいたるまで多くの白川村関係の記事に引用されている。たとえば、白川村の商工観光課が出している「古心巡礼」という観光案内パンフレットの冒頭にはタウトの肖像と共に荻町の写真が掲載されている。しかし、タウトがそのとき荻町までは行かず、彼が自分の目でたしかに見たのは御母衣の遠山家だけであったことも、また事実である。⁵⁾

昭和十二年に初版が発行されたタウトの“Houses and People of Japan”⁶⁾には遠山家とオーストリアの民家の写真が並べて掲載されている。ここでタウトは日本とヨーロッパの住居の類似性について、さまざまな事例を出しながら、日本の農民は世界共通語を話さないけれども、住居を通じて語っているのだ、とその国際性、普遍性を賞賛している。タウトはいくつかの文献に合掌造りの建物に関する著述を残しているが、最も有名なものは『日本美再発見』であろう。高山から自動車で白川村に入ったタウトは次のような感嘆の言葉をもらしている。⁷⁾

この辺の景色は、もう日本的でない。少くとも私がかつて見たことのない風景だ。おびただしい栗の樹、白い花をつけているのもある。これはむしろスイスか、さもなくばスイスの幻想だ。

背景に連互する雪を戴いた山並みは、この錯覚をいやが上にも強める。広闊な深い谷の中に、尖った藁葺屋根が嵌めこまれている景色もまた日本的でない。ただ水田があるので、やはり日本だったとわかるのである。

しかし、タウトは褒めてはかりいるのではない。平瀬の旅館ではまわりがうるさくて寝つけなかったこと、汽車や車の停車場が「貧弱ないかものだらけ」であること、御母衣の遠山家の「俗悪な」郵便局について苦言を呈している。ちなみにこの遠山家の郵便局は合掌造り家屋の横に建てられた下見板張りの瀟洒な木造建築だったが、西洋人タウトの目にはそれが「俗悪」と映ったものであろう。平瀬で一泊した翌日、土砂降りの雨の中タウトは御母衣まで歩き、牧戸では崖崩れのため長時間待たされ、しまいには「何としてもいまいましい白川行きだ」と捨て台詞を吐いている。タウトはその著作のなかで一貫して、白川村の景色、合掌造りの構造は「西洋に匹敵するため」素晴らしいと述べているにもかかわらず、土砂降りの雨の中では白川村の人々の生活や交通の不便に共感することも同情する余裕もなかったようである。

こうしたタウトの文章のなかで、白川村や合掌造りの建物を絶賛している部分だけがその後多くの文献で合掌造りの建物が「海外からみてもすばらしい」ことの証明として引用されることになる。引用はエッセイや論文など、ジャンルを超えているが、特筆すべきは世界遺産の推薦書にも登場していることである。文化庁が作成した「白川郷・五箇山の合掌造り集落」の世界遺産推薦書のなかで、世界遺産にふさわしい価値の説明の一部にブルーノ・タウトが引用され、それを「いかに日本の中では

他の地域で見られない顕著な特色を持っていたかの証拠」としている。引用されている部分は、次のとおりである。

これらの建物は全く合理的かつ論理的な構造をしている大変特徴的なものである。…すべてがヨーロッパ中世の大工仕事と同じ論理を示している。ゴシック建築といっても良い。屋根は西洋の中世期の屋根のように明快な三角形のジョイントからできており、建物の長手方向にわたる筋交いで風や地震に対する斜めの力に対して補強されている。また、屋根の構造材は非常に論理的に柱にはめこまれている（日本語訳筆者）^m。

これは、タウトが昭和十年に「日本文化についての講演」をしたときの記録である。この文章からも合掌造りの建物がいかに「西洋」と同等にすばらしいかという部分が強調されていることが読み取れる。ブルーノ・タウトの世界遺産推薦書への引用の理由としては、海外の（おそらく欧米の）専門家の賞賛を引用することで、合掌造りの普遍性を証明する一助にしたのではないかという点が考えられる。タウトは桂離宮をも「発見」し、「日本文化」に関するその言葉と日本ナショナルリズムの盛り上がりには連動しあうところがあったとも言われている^m。合掌造りの建物においても、その言葉は内容よりも「普遍性の証明」という役割と共に流布拡大し今日に至ったものである。

11 観光地への胎動

御母衣ダム——観光地化のきっかけ・過疎と村起こし

昭和四十年代に白川村が観光へと動き出した理由について、当時の和田正美村長はインタビューに答えて、「水力発電用のダムが建設されたのがきっかけでした」と述べている。大正十五年（一九二六）の平瀬発電所を皮切りに村には次々とダムが建設された。白川村を南北に貫く庄川には八箇所のダムがあり、現在も村の収入の二割は電源開発に関係するものである。中でも、昭和三十八年に運転を開始した御母衣ダムは東洋一のロックフィル・ダムとして知られている。ロックフィル・ダムとは通常のコンクリートでつくる重力式とは異なり岩石や土を積み上げてつくるもので、地盤が強固でない場合に採用されることが多い。ダムに水没する照蓮寺の老桜、通称「莊川桜」が昭和三十五年に移植されたときの苦勞は、NHKの「プロジェクトX」でも放映された。ダム建設に伴い、昭和二十六年には二百八十五棟あった合掌造りの建物のうち、百棟近くがレストランなどに使われるために移転、消失した。

（御母衣ダム）から先は唯もう東洋一のロックフィル・ダムの建設にすべて犠牲となつていきます。大きなダンプカーやパワースショベルの列んだモータープールの真ん中にぱつぱりと合掌造りの屋根が残っているのはなんとなく哀れな姿でした。

これは、昭和三十六年の随筆だが、急激な近代化とそれに対する危機感が渾然となっていた時代、先述の「開発と保護」が可視化されたダムと合掌造りの建物は格好のモデルであったと考えられる。また、白川村のダム建設は昭和のはじめから反対運動を引き起こし大きな事件に発展したこともある^m。当時盛んだった林業では伐採した木材は庄川を使って流送していた。しかし、ダムができればこの川流しを続けることができないため、飛州木材が電力会社を相手取り訴訟を起こした。これは「庄川問題」として大きく取り上げられた事件で、地元住民や自治体なども含め、補償問題などが複雑に絡み合う中でダム建設がジリジリと進められていった。御母衣ダムの建設は昭和二年からすでに計画されていたというが、飛州木材などによる「激烈な闘争」を経て、着工されたのは三十年後の昭和三十二年のことであった^m。このときは地元住民百七十四戸によって「御母衣ダム絶対反期成同盟死守会」が結成され、解散したのはダム工事も中盤の昭和三十四年のことだったという。この反対運動の激しさの理由として、電源開発側は「大家族に培われた生活基盤が保守的な家長の意見が中心となったこと、家族の連帯感の強さ」などをあげている^m。

冒頭に述べたようにダム建設は、白川村が観光地としての道を歩み始めた大きなきっかけとなった。最も大きな理由のひとつは、工事による人口の急激な増減である。人口の推移をみると、御母衣ダム建設前の昭和三十年代後半には二千人あまりだった村の人口が一気に九千人を超えるまでになっている（図1-18）。増加によってダム建設当時は周辺にバラックが立ち並び活況を呈していたが、完成と共に人口が激減し過疎化が始まったことから「電源開発に代わる産業として観光に目を向けるように

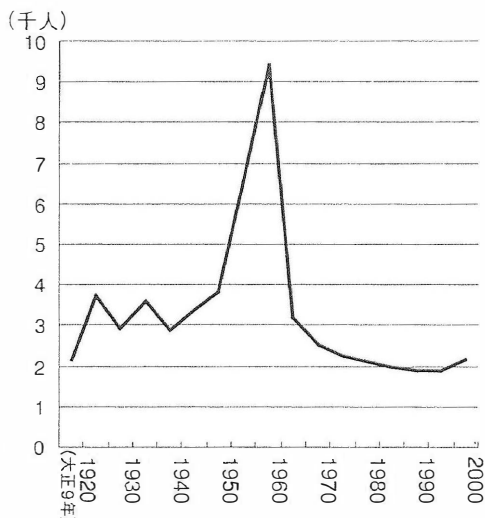


図 1-18 白川村の人口の推移 (データ)

(白川村 HP <http://shirakawa-go.org/lifeinfo/outline/index.html> [2006.2.10 参照])

なった」のだという。さらに、このときにダムの補償として道路ができていたことが、村の観光への方向転換を後押ししたのである。

ダムが完成したのは、ダムそのものが観光資源となった。ダム建設中からたくさんの見物人が爆破作業を見に来ており、昭和三十一年に村が作成した観光ポスターのひとつは御母衣ダムのものであったことからわかるように、「東洋一の御母衣ダムは完成後しばらくのあいだ村の重要な観光資源と位置付けられていた(図1-19)。しかし、合掌造りの集落が注目され、ダムそのものが自然を破壊する「悪者」になるに従って、観光資源としての魅力を失っていったと考えられる。御母衣ダムの見学施設は平成十三年にそれまでのダム展示館からダムサイトパークの御母衣電力館に衣替えをし、入り込みは年間十万人あまり、白川村全体の来訪者数の〇・七%前

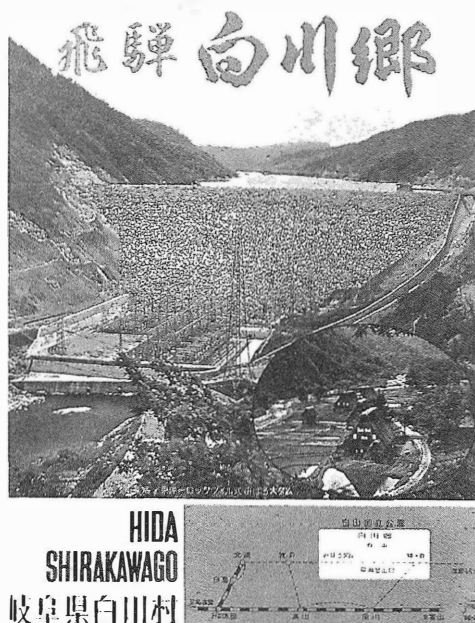


図 1-19 白川村の観光宣伝ポスター（白川村役場所蔵資料）

後であり、観光資源としては健闘しているといえる。

ダムは今も威容を誇り、膨大な電気を関西に送り続けている。近くの御母衣旅館には「オーシャン・ビュー」ならぬ「ダム・ビュー」の部屋があるが、間近に迫るロックフィル・ダムの存在感は圧倒的である。観光地への方向転換は、社会的な必然であったとはいえ、ダム建設がさまざまな側面から影響を及ぼしていたことは明らかである。近代化、合掌造りの建物の保存、観光という現在白川村で耳にするキーワードはすべて、この時点でダム建設によって生成されたものだったということもできる。

荻町の俯瞰景の発見

現在「世界遺産の白川郷」として人々が最も目にする荻町の写真といえば、城山からの俯瞰であろう。どの書籍にもパンフレットにもかならず荻町のこの景色が登場する(図1-1)。城山は荻町集落の北に位置する標高五百五十メートルの山で、山道を登り駐車場の細い通路を抜けるとパッと目の前に荻町の全景が開けるため、誰もが「ウワァー」と感嘆の声をあげる場所だ。ある場所が観光地として有名になるには誰もが写真を見たときにその場所を思い出すことができるような、アイコンとして「売れる」景色が必要なのだが、世界遺産である「白川郷」がこれほどまでに有名になった背景には、この城山からの景色が一役も二役も買っていると考えられる。しかし、実はこの俯瞰景は昭和四十年代になってから広まったものであり、この景色を見ることができる眺望地点である荻町城趾も「見られる場所」から「見る場所」へと、奇妙な反転が起こっていたのである。

荻町城趾は名前の通り荻町城があつた場所である。荻町城は土塁や堀の形状から中世末期に構築されたものであるとも言われているが、山下大和守氏勝が築いたとされ、現在も「城山」と呼ばれている。戦前に白川村を紹介している地誌では全体の約三割がこの城趾の由来を取り上げている。しかしこれらの文献ではそこからの眺めについては一切ふれられていない。たとえば、

こゝに古城跡があつて、山下大和守代々の據る所、山下氏は白川郷の領主内ヶ嶋氏の重臣であるが、城跡の麓に「御所」と土地の者の稱する地名があつて、南北朝の頃、和田某なるもの南朝

方の貴族を擁して落人した所と傳へ、和田と縁ある内ヶ嶋氏の入國後こゝに家臣山下氏を置いたのであった。和田の末孫は現に土地の豪族として聞こえて居る。

など、関係する人物に関する歴史的な説明のみである。

戦後になって、荻町城趾の説明が掲載されている昭和二十五年のものには荻町城趾から「鳩町（荻町の間違いであろう）鳩ヶ谷（マヤ）の静かにも美しい繪のような情景を俯かんし」と書かれ、昭和四十三年の白川村史にも「眼下に庄川の清流と荻町、鳩谷の素晴らしい情景を見下ろし、遙かに雄大な白山に連なる山々を一望する風向絶佳の城趾である」と説明されている。おもしろいのは、現在の眺望地点からは鳩谷を俯瞰することはできないことである。おそらくこの時期には現在の展望台付近に鳩谷も俯瞰できるような場所があったと考えられる。さらに、昭和二十年代は薪炭材の利用や稊まぐわの採取など山の利用が盛んで、樹木が現在ほどなかったため、荻町だけでなく鳩谷も眺望できたものであろう。

荻町の俯瞰写真が本に初めて登場するのが昭和三十六年のものである。ところが、「城趾の山に登るとこれら合掌造りの群落が一望に見渡せます」という文章と共に掲載されている写真は現在よりも低い位置から撮影されており、全景ではあるが少し違ったものとなっている。昭和二十五年の俯瞰景では庄川の西岸から、つまり合掌造りの建物群を横から撮影した写真を掲載しているものもあり、一九六〇年代はじめまでは俯瞰景のスポットが定まっていなかったことがわかる。昭和五十三年に村が「城山展望台」を整備し、すぐ隣には「城山天守閣」という飲食店が開店した。昭和五十五年ごろから城山からの俯瞰景の掲載が倍増したのはこれらの整備がきっかけである。この「城山天守閣」は個

図 1-20 「城山天守閣」での記念撮影の様子（平成 18 年）



図 1-21 城山展望台の「世界遺産」の石碑（平成 19 年）

人経営の食堂兼土産物屋であるが、主人のポリシーで、駐車場と展望場所を無料で解放しているため、バスで続々と観光客が乗りつけては記念撮影をしていく(図1-20)。その賑わいとは逆に村の整備した城山展望台は「世界文化遺産」という立派な石碑が建っていて(図1-21)、駐車スペースもあるのだが、あまり利用されている様子がない。見える景色はというと、後者のほうが合掌造りの建物を立体的にとらえることができるが、マツが茂っているのでやや視界が狭められている(口絵)。

さて、史跡である荻町城趾は怎么样了。この場所は世界遺産のコアゾーンには含まれておらず、「世界遺産の白川郷合掌造り集落」としては「史跡」としての城趾は価値を構成する要素とはなり得なかった。さらに、一九九〇年代以降の資料には、約八割が荻町城趾あるいは「城山天守閣」から撮影した荻町の全景写真を紹介に用いているにもかかわらず、そこがかつて城のあった場所であることには一切触れていない。

このようにして、史跡として「見られる場所」であった荻町城趾は荻町の集落を「見る場所」へと反転し、公園やレストランの名前にのみその由来の痕跡をとどめているのである。

12 文化財としての集落景観

——重要伝統的建造物群保存地区選定と「計画」の視点

合掌造りの建物から荻町の集落景観へ

それまで白川村二十三集落のうちのひとつにすぎなかった荻町が世界遺産に向けて大きな一歩を踏み出すきっかけとなったのが、昭和五十一年の国の重要伝統的建造物群保存地区への選定である。町並み保存運動は昭和三十年代後半から各地で展開されたが、妻籠に代表されるこうした運動は地元の活動から発展し、建築史研究者を動かしたとされている。昭和四十九年には全国の連携組織である「町並み保存連盟」が結成され、昭和五十年の文化財保護法改正による伝統的建造物群保存地区制度の導入など、制度も呼応する形で整えられた。建築史研究の延長にある民家の文化財指定による保存が、国に価値付けされ指定される「トップダウン」式であるとするれば、これらの町並み保存運動は「ボトムアップ」式の発想であり、かかわっている研究者は同じでもその立脚点は異なるということもできる。

合掌造りの建物の保存のための住民組織である「白川郷荻町集落の自然環境を守る会」（通称「守る会」）が結成時、妻籠にならったことは知られているが、荻町においても当初は住民主体で保存が進められていく。守る会は戦争から復員した中核メンバーによる活動を母体として、昭和四十六年に発足した。「売らない、貸さない、壊さない」を謳った「白川郷荻町集落の自然環境を守る住民憲章」

は現在まで荻町の保存に大きな影響を与え続けている。当初は守る会のメンバーが移築や改築を検討している各戸を説得するために奔走し、合掌造りの建物をまもる活動を進めていったとされている。⁶⁰⁾ こうした保存の動きや重要伝統的建造物群保存地区選定に連動して、合掌造りの建物単体から荻町に限定された「集落景観」へとその対象が動くのもこの時期である。比較的早い時期に民家の一類型としての個々の合掌造りの建物ではなく、かたまりとしての荻町合掌造り集落に目を向けたものの一つとして、昭和五十四年の大河直躬の『日本の民家』があげられる。「合掌造りの村」と題された説明文では「主屋以外の付属建物が大変少ない」ことや、「屋敷林がほとんどなく、水田が軒下まで作られている」ことなど集落景観の特徴が冒頭に述べられている。⁶¹⁾ かつて注目されていた集落には合掌造りの建物がなくなり、保存運動によってまとまった合掌造りの建物が残ったのが荻町のみになってしまったことによって、これまでの保木脇、芦倉に代わって、「合掌造り集落」として荻町へとまなざしが移行したのである。

重要伝統的建造物群保存地区への選定と計画の視点の導入

建物単体ではなく集落全体の保存へ、点から面へというのはよく耳にする言葉である。つまり建物だけではなく集落全体を面としてまもることが重要で、そのためには田んぼや畑、道などの土地利用の構成まで目を向けなければならないということである。白川村では伝統的建造物群保存地区指定のために荻町に集中した徹底的な調査が、指定前の昭和四十九年に一回、重要伝統的建造物群保存地区選定の十年後の見直し調査として昭和五十九年から六十年にかけて一回、合計二回行われた。第一回

の調査ではもっぱら合掌造りの建物に主眼がおかれ、土地利用や建物以外の要素に関する現状把握はほとんどなく、保存対象の項でもわずかにふれられているに過ぎない。⁸⁵一方、後者の見直し調査では、小寺らが写真と共に集落景観を分析している。道路や水路など建物以外の要素にも着目し、生活環境のアンケートも実施され幅広い視点から調査が行われた。荻町において「集落景観」という視点が具体的に持ち込まれたのはこの見直し調査がはじめであるといつてよい。さらにこの調査では、いわゆる「ゾーニング」が提案されており、対岸の小呂地区を加えた荻町を九地区に分けそれぞれの保存の方向性を示している。⁸⁶たとえば、展望台の荻町城址がある城山は日地区とされ、「景観上重要な場所であり」「保存地区に含めるべきである」、中心部のE地区は「できるだけ田畑や空地を確保してゆく」など、示唆に富む方針が立てられている。ところが残念ながら上記のいずれも具体的な施策に移されることはなかった。今でも荻町の保存地区をゾーニングして保存の方針に強弱をつけてはどうか、ということが折りに触れて話題にのぼる。つまり、合掌造りの建物がたくさん残っていて観光客も多く訪れるところはより厳しく、地区の端で合掌造りの建物も少なく観光客もあまり来ない場所はより緩やかな規制にしてはどうかという提案である。これは住んでいる人にとっては「場所によつて厳しさが違うのは不公平」という思いがあるらしく、なかなか実現には至らないようだ。

この時期の背景となる全国的な動きとして、昭和五十五年以降の町並み保存運動の多様化があげられる。西村は①点から線、線から面の保存の後、「点のネットワーク」という考え方の導入、②保存と創造を同一平面で考える動きの活性化、③地域経済の再興と町並み保存の調和の問題の顕在化の三点をこの時期の傾向としており、⁸⁷こうした流れの結果、荻町でも見直し調査の時点で多様な視点が導

入されたものと考えられる。その後、平成元年以降、西村の指摘する②と③の結果ともいえる「文化財の活用」や、「文化観光」に関する模索が始まる。これは、「何を保存するか」から「いかに保存するか」「保存したものをどうやって使うか」、つまり「価値付け」から「計画」へと視点が拡大されたともいえ、白川村における研究にも「計画」の視点が持ち込まれた。

平成七年の西山徳明⁸⁰の研究がそれまでのものと大きく異なっているのは「計画」の視点が持ち込まれたこと、「景観」を全面に押し出していることである。「景観管理計画」あるいは「景観の変容と維持」に軸をおいて景観目標像を整理し、景観変容の要因から景観保全の方向性を探っている。これら計画的視点から書かれたものは、多くが景観や観光および合掌造りの建物の現状を「探訪」し、近年の変化を追える範囲で把握し、変化の要因を生活や社会状況に求め、望ましい方向性を考察するという方法を用いており、この点においては戦前の「探訪型」の民家研究に立ち返っているともいえる。

白川村の建築研究の系譜を見ると、竹内、稲垣らの民家研究とその後の西山に始まる集落景観研究のあいだには大きな転換が見られる。つまり、白川村の合掌造りの建物はどうなるものだろう、と間取りや生活を詳細に把握することから始まり、次に把握した建物に建築史のものさしをあてて測ったのが民家研究であった。これらはいずれも建築史の流れに合掌造りの建物という民家の一形態を乗せ、どれだけ（文化財的な）価値が個々の合掌造りの建物に見出せるかという視点であり、あくまでも、その学術的、文化財的な価値は「建築史」の世界の価値であった。たとえば「建築史」というとても分厚い事典の「民家」という章の中のほんの一項目としての「合掌造りの建物」というカテゴリーを確立する作業であったともいえる。しかし、計画の視点が持ち込まれることによってその視線は一気

に地域そのものへと向けられることになったのである。

このような流れからは、ふたつの問題点が整理される。ひとつ目は、文化財と計画の視点についてである。「文化財」は「保存」と表裏一体である。つまり、単体の建造物の場合、その建物をいつの時点に戻して修復するのかを決定する。そして、その時点の状態に保つために何らかの人為を加えなければならぬが、建物単体の場合には「保存」はかならずしも計画の問題ではなく、「いかに復原するか」の材料として「技術」、「痕跡調査による研究」の結果に負うところが大きい。しかし、集落を文化財とするときには「保存」あるいは「保全」には計画的な視点が必要不可欠であり、さらに合掌造りの建物だけではなくさまざまな空間要素を一体のものとしてまもる必要がある。にもかかわらず、見直し調査および西山の研究まで「計画」の視点が持ち込まれず後手にまわったことが、現在地区の抱える合掌造りの建物偏重の原因とはいえないだろうか。

二番目は、町並み保存運動は当初そのほとんどが、妻籠や高山などのいわゆる「町家」や「武家屋敷」で、白川村は数少ない「農村」だったということである。町家か武家屋敷であれば、「建造物群」という名前の通り、個々の建物の集合として、ファサード保存など、建築単体の保存の延長としてとらえられる部分も大きい。が、農地や山など「環境と一体」となった農村集落景観の場合、そうした発想を大きく転換しなければ計画には結びつかない。このなかで当時の白川村教育委員会の文化財担当であった山田は「白川村荻町保存の問題点」として、以下のように記している。

荻町の特徴は、何といっても、その面的性格によって、線的性格の強い、いわゆる「町並み」

と景観を異にするとところにある。(中略) 建物のファサード以外の外面や、内部空間というか、奥行き空間において、かなり自由が認められる町並み保存に対して、荻町地区の保存は、建物の四面とも、周囲の「残された空間」とも言うべき、水田や畑等が構成する空間にまで及ばざるを得ない。⁸⁸

重要伝統的建造物群保存地区第一号である七地区のうち唯一の「農村」である白川村荻町が他の町家や武家屋敷と共に選定されたことは、山田の言うところの「残された空間」における出んぼの減少や増築家屋の増加など現在指摘されている問題につながっているといえよう。

13 「観光立村」と「白川郷」の変化

観光立村

観光目的地としての白川村が誕生する契機となったダム建設の話はすでに述べた。ここではその背景として白川村内部の「観光立村」の動きを簡単に説明したい。村発行の広報誌の村長の年頭挨拶には、かならず前年のまとめと新年の抱負がかなり具体的に述べられており、村の方向性を把握するには適当な資料である。観光地としての方向性が浮上した昭和四十年以降の年頭挨拶から白川村の舵取りの様子を見てみよう。

昭和四十一年には「農産業と観光と両々相まった豊かな村」としていたのがはじめて「観光と農業」と観光が前に押し出されたのが昭和四十五年である。それまでは昭和三十二年九月の「新観光地三方岩獄開発現地踏査」の記事、あるいは昭和四十二年、四十三年の年頭挨拶の「白川温泉復元工事などの具体的な観光資源整備についてはふれているものの、あくまでも「先づ第一に、農産業の伸展と基盤造り（中略）又一つは、観光の振興と基盤づくり」というように農業に主眼が置かれている。ところが、昭和四十五年では同じ野谷村長が「未来の観光村・基礎づくりが成立」というタイトルで「観光と農業のむらづくり」について年頭の挨拶を述べているのである。昭和四十四年には遠山家が「白川郷民俗館」（翌年「旧遠山家民俗資料館」に改名）として開館し、大白川から十三キロメートルも湯を引いて平瀬温泉が完成したが、これが直接の原因というよりはむしろ、すでに述べたように昭和

三十五年「東洋最大のロックフィル・ダム」である御母衣ダムの完成、昭和三十七年の白山の国立公園指定が引き金となってさまざまな観光資源整備が推し進められ、テレビや映画のロケなどによって内外共に白川村が認識された結果であると考えられる。これは雑誌「旅」にはじめて白川村が「旅行先」として取り上げられた昭和四十六年ともほぼ同時期で、このあたりから白川村は自他共に認める観光地として動き出したといえる。西山は昭和三十五年以降に「観光客と呼べるような人達」が御母衣ダムや遠山家にチラホラと訪れてきたとしており、このことから、白川村が観光地へと大きく方向を定めたのは昭和四十年代であったことがわかる。

その後昭和五十年代までは「観光と農業」や「農業と観光」が混在しており、観光と農業は二つの柱としてそれぞれに常に方策が述べられていたが、昭和六十年代にかけて徐々に農業がトーンダウンし、平成に入ってからほぼ完全に姿を消している。昭和五十四年、五十五年の挨拶では「観光農業村」というフレーズが見られ、昭和五十六年の挨拶では当時の和田村長が「本来は村の産業基盤と言うべき農林業では現状は全くなりたない実情、しかしいざというときは農林業と思っているのです……」と述べており、苦しいながらも、まだこの時期には農業が基盤という意識が残っているとみることができ。しかし、同じ和田村長が平成二年の年頭挨拶では、「観光立村をめざすが村の課題は春から秋のシーズンに偏った夏型から、冬を含めた通年型に転換することです」と観光の具体的な問題点も指摘しており、農業については一切ふれられていない。こうした広報の記事からは当時「観光立村」に向けて力を注ごうとしていた熱意が伝わってくるが、これにあわせるように昭和五十年代前半に相次いで道路の整備も行われている。雪に閉ざされる冬場の交通手段の確保は「秘境」で

あった白川村にとっては長年の悲願であり、ダム等の電源開発に端を発した道路整備は、平成二十年度開通予定の「東海北陸自動車道」まで連綿と続いている。

その後、「観光立村」の勢いも実際の観光地化に伴って影を潜めることになる。和田氏の次の高桑村長も平成四年の段階ではスーパール道の不通に伴うキャンセル客の増加をあげて、「合掌と温泉、そしてスーパール林道は三位一体の観光資源であり、どれが一つ壊れても村の活性化はありえないことです」としており、ここではまだ「観光立村」の勢いが残っているのだが、世界遺産登録後にこれが一変した。平成九年には「世界遺産に登録された影響で観光のお客様が予想以上に増え、大変ありがたいことではありますが、特に荻町地区では夏から秋への姿を見ておりまして、中・長期的な課題や官民での全体的な取り組みが求められています」、翌年には「賑わいすぎて、地元の苦情、お客様の苦情も多々ありました。まず地元的生活環境を守ることを前提に勤める努力をみんなで行わなければなりません」とすでに観光地となった白川村の問題点が次の課題として大きくあげられるようになっていく。

つまり、大きな流れとしては昭和四十年代から五十年代にかけては農業から観光への方角転換と「観光立村」をめざす勢いがあり、その結果、実際に観光地として「立った」世界遺産登録後は、一転して観光地としてどうすべきかを模索している状況が現在も続いているといえる。

雑誌「旅」にみる観光目的地としての「白川郷」の誕生

このようにして農業を置き去りにしながら観光地を目指してきた白川村だが、それでは観光目的地

としてはいつごろ、どのように世の中に認識されていたのだろうか。

「旅」は大正十三年（一九二四）から現在まで、出版元を変えながら続いている旅行雑誌である。⁹⁹ 外からの認識としてはこの「旅」の掲載記事からおよその様子を推測することができる。創刊時から平成十四年（二〇〇二）までの間、白川村そのものが記事になっているのが十三回、他の記事の一部に白川村についてもふれているものが十二回、写真のみの掲載が五回（うち表紙三回）である。

最初に白川村についての記事が掲載されたのが大正十五年（一九二七）の「諸國民謡行脚」という松川二郎による全国の民謡を紹介する連載で、「飛驒」の筆頭に「白川わじま」が紹介されている。文化財のところでは触れなかったが、白川村では伝統芸能がさかんで、「白川わじま」のほかに「こだいじん」と呼ばれる芸能がある。現在でも祭りなどの行事では唄いや踊りが三味線と共に披露される。白川の人は皆芸達者で驚くばかりである。さて、この民謡の記事では白川美人についてかなり詳細に記述され、さらに大家族についても説明されている。

高山地方では美人をみると直に、『彼の女は白川者ぢやないか？』と云はれる程、白川郷は美人の多いところである。（中略）然しその美人たちは古来傳統の極端な家族制度―家長専制、分家禁止の制度に支配せられて、長子以外は公然と結婚することも、又他郷に出ることも許されなかつたのである。彼女等に戀はあつても、それは極めて局限された範圍に於いてのみ許されてゐるにすぎなかつた。

美人が多く、古来の伝統に縛られて生活しているという論調は、先に述べた風俗画報の「太古の遺風」をもとめるまなざしと重なっている。

白川村のみを対象とした最初の記事は昭和六年五月号で、木村春樹による「平家の部落 白川郷を訪ふの記」という紀行文である。富山方面から白川に入った一行は小白川と御母衣の遠山家で一泊している。精一杯のもてなしを受け、「他郷の人々に対しては實に懇切丁寧を極め、若しも旅人などの宿を乞ふのには、何時も快諾を與へるという有様」と記している。昭和三十一年には高山と荻町間に濃飛バスの運行が開始されているものの、その後一九六〇年代までの内容はいずれも同様な紀行文の形式による「大家族」の説明で、土地や風俗の「紹介」にとどまっており、荻町や白川を観光目的地として取り上げたものはなかった。

「観光」と白川郷が結びつくのが「保護される観光資源」の連載で、昭和四十五年に合掌造りの建物の保存が小さく紹介されているものである。加須良の家が移築され公開されること、観光資源保護財団で景観を維持するための補助を行っていることなどが紹介されているが、観光案内ではない。本格的な観光をうながすための記事としては昭和四十六年の「合掌造りの秋どぶろく祭」である。どぶろく祭りとは毎年秋に村の各集落で行われる祭りで、神社で年明けから仕込んだどぶろくを飲み、獅子舞を奉納する。祭りとなると今でも村中の人が湧きかえり、あちらこちらの家を訪問しては食べたり飲んだり、夜には「芸能」と称して伝統芸能から仮装の寸劇までさまざまな余興が繰り広げられる。祭りでは神社の境内でどぶろくが供されるため、どんどん飲んでしまったかに酔っ払うという具合である。集落ごとにどぶろくの味が異なるため、「今年の鳩谷は辛かった」「あそこのは甘かった」など、

祭りが終わってからの品評会ともなる。この記事でもこうした祭りの様子を紹介し、簡単な地図と共に荻町か鳩谷の祭りに行くことを薦める内容となっている。

「旅行先」としてルートや地図が掲載されたはじめての記事は同じ昭和四十六年の「心に残るひとり旅コース」で、コースの一つに白川郷が設定されている。この後、昭和五十九年十月号には「ボンネットバスで訪ねる合掌造りの集落白川郷」として「ボンネットバス白川郷バスツアー」が紹介されている。この赤いボンネットバスのツアーは高山発着、往復五千八百円で片道利用もできた。ツアー内容は白川郷の自由見学のうち、御母衣ダムなどをめぐるものだった。掲載された集合写真の十五名のツアー客のうち十二名が若い女性で、まさに当時の「アンノン族」を象徴している。白川村の「旅」への掲載は昭和四十五年から五十年代までが十一件と集中しているが、これは昭和四十六年に始まった旧国鉄のデイスカパー ज्याパンキャンペーンの影響であると言われている。「目を閉じて……何をしよう」というキャッチコピーと共に始まったこのキャンペーンは若い女性をターゲットにどこでもない場所、名前も知らない日本の田舎に行くことを提唱し、それまでの「国立公園、観光地中心の観光意識は『ほとんど一蹴された』」とも言われている。同じ時期に保存、観光に向けて動き出した「白川郷」はこのキャンペーンの対象としては格好の場所であったと言える。余談になるが、当時白川村を訪れた「若い女性」が大恋愛の末、荻町にお嫁に來た例もある。白川村にとってこのキャンペーンは観光地化の後押しをしただけでなく、別のところでもちゃんと実を結んでいたのである。このころの記事はいずれも荻町だけでなく五箇山や他の集落も対象にしていること、どぶろく祭りなどが中心で、合掌造りの建物やその集落景観といったものにはそれほど興味が向いていないことが共通点

としてあげられる。

縮む「白川郷」

次に、観光地の名称としての「白川郷」について見てみよう。繰り返すが、江戸時代には「白川郷」というのは現在の莊川村、白川村、清見村の一部の合計四十二ヶ村のことであった。昭和初期の地誌では正確な「白川郷」の説明がされている。昭和四十年代には観光地としての知名度がまだ低かったせいか、白川郷が掲載されていない旅行ガイドブックもある。かろうじて掲載されているものには昭和四十三年の「莊川村、白川村の白川郷」あるいは昭和六十三年の「鳩谷、荻町、平瀬などの集落を総称して白川郷と呼んでいる」という風に本来の「白川郷」に近い説明がされている。しかし、平成五年以降の旅行ガイドブックを見ると「白川郷」という名前が常にタイトルになっているもの、それはすべて「白川郷」イコール「荻町」として用いられている。

この変化をよく表しているのは中切の御母衣・平瀬と荻町の関係である。これまでも述べてきたように御母衣や平瀬には大家族研究のきっかけとなった遠山家、御母衣ダム、大白川から湯を引いた平瀬温泉、足を伸ばせば白山や白水の瀧もあり、「観光」という点ではむしろ荻町よりも歴史が古く、多様な資源がある。旅行ガイドブックを見ると両者の関係は三段階にわたって変化をしている。まず、平成五年以前に見られるものでは御母衣ダムや遠山家は荻町合掌集落と同等の扱いで掲載されている。つまり、「白川郷」というタイトルの下に白川村の観光資源が同じ扱いで紹介されているのである。平成二年のものは莊川も入れて一体の「白川郷」として掲載されているものもある。

次は、御母衣が「莊川・御母衣湖」として白川郷と別扱いで登場するもので、平成四年以降現在までのうち、七冊がこの形であったが、そのうち三冊までは「白川郷・五箇山」のタイトルのもとに「白川郷、五箇山、莊川・御母衣湖」の三項目が設けられていた。また、なかには白川郷は五箇山と共に掲載され、莊川・御母衣は「郡上八幡周辺」の一部として掲載されているものもあり、白川郷（＝荻町）と御母衣は同じ白川村であり、かつては同じ白川郷であったはずなのだが、観光の領域としては分離していく様子が明らかである。

さらに、平成十二年以降見られるのが、御母衣は「平瀬温泉郷」と名称を変え、白川郷から「ひと足のばす」ところとして紹介されているものである。中には莊川や荻町は紹介されているが、それに御母衣が含まれていないものもあり、これで完全に御母衣は荻町のオマケという存在に成り下がってしまった。岐阜県全域など広域を扱っているガイドブックでは「白川郷」のタイトルのもとに「莊川の里」など莊川村の観光資源や清見村の「ラベンダーフェスタ」、平瀬温泉などが荻町の飲食店などと同レベルの扱いで小さく掲載されている。

これまで取り上げてきた観光資源の遠山家、白水の瀧、御母衣ダムなどはいずれも「白川郷」としての荻町の合掌造り集落の台頭によって蹴散らされてしまった感もある。本来の「白川郷」から荻町と御母衣が分離し、さらに荻町が「白川郷」としてクローズアップされるのに伴い、逆に荻町（＝白川郷）に吸収されていったのである。こうした変化を後押しした最も大きな要因はやはり平成七年の世界遺産登録であろう。「白川郷・五箇山の合掌造り集落」として白川村では荻町のみが登録された。これによって「白川郷」イコール「荻町」のイメージはゆるぎないものとして広まったのである。

二種類のネガティブな感想

観光化に伴って変化したものは他にもある。それは訪問者の感想である。

わたしは、思わず、息をのんだ。

オレンジ色にふちどられたカー・ミラー球形が、青空と合掌集落を、あざやかにトリミングしているのを発見したからだ。田んぼ道の屈曲部である。カー・ミラーと合掌集落、この異質な組合せが、見事な映像として、現代的状況を象徴している！

これは昭和五十年に書かれたエッセイである。合掌造りの集落が「歴史的環境」として位置付けられると、その「歴史性」と現実の近代化を対照してさまざまな印象が語られることになる。しかし、この文章のようにその対比に素直に驚いているものは少なく、多くは「近代化」に対してネガティブな意見を述べている。こうしたネガティブな感想は、昭和のはじめから現在までみられるが、その内容には二つのタイプがある。

まず、「意外と近代化されていた」ことによる落胆である。たとえば、

往古の大家族の行はれ居る家屋の中に電燈の点ぜられ居るを見たるは余の意外とするところであつた。^m

時々笠台にビニールを使っているのはガツカリです。

イロリは大半がストーブになっていた。屋根裏に蚕を飼っている家は見る事ができなかった。

というように、近代化の証をみつけては意外だと言って残念がつている。毎日グラフの記事は「消えゆく日本の民家」のタイトルどおり、「イロリはストーブ、洪茶はコーヒー、モンペはセーター 話し合うのも民話ではなくなった 万博のお話であった」というキャプションが写真につけられている。今から思えば「ほっといてほしい」とも言いたくなるような内容である。これは「太古の遺風」や「秘境」などのイメージが常に「近代化」に対峙するものであり、「隔絶されて古い暮らしがそのまま残っているはず」という訪問者の思い込みから生じるものでもある。実は数年前に白川村にはじめて行ったという人から、「何で田んぼに機械が入っているのですか？モンペで作業しないのですか？」と真顔で聞かれたことがあるのだが、今回の資料の中ではこうした「意外と近代化されている」という印象が述べられているのは昭和四十年代までである。余談だが、白川村に行くと「意外と近代化している」どころか、一番新しいものを見ることもしばしばである。筆者が全自動のトイレに生まれて初めて入ったのも、最新の携帯電話の機種を教えてもらったのも、これまでに一番立派な車に乗せてもらったのも白川村である。

次にあげられるのが観光地化およびその影響による形骸化に対する危惧である。平成十三年のアンケートの自由記述でも荻町を訪れた感想で「素朴で本当の田舎らしさを期待したが観光化が進みすぎていて思っていたところと違い残念だった」というものもあった。観光客が来るから良いところを見

せようと努力しているのに、その努力にがっかりされるというのは観光地となった「農村」の宿命であろう。これがもともと商売をやっていた宿場町などの場合は「商売」という生業自体は変わらないためにこのような齟齬が起らない。田を耕し、カイコを飼うという生活の現れであった「農村風景」が観光地となったときに、いったいどうすれば観光客は満足するのだろうか。

これら二種類のネガティブな感想は互いに表裏一体である。つまり、生活の実態がなくなただ古い「もの」だけが残ればそれは「形骸化」として落胆されるが、社会の流れに応じて生活を変化させれば「近代化」としているといつて落胆されるのである。合掌造りの建物や集落が観光資源となるに従って、前者が増加するのは自明であり、かといって保存をせずに生活を近代化させればそれも落胆の種となる。この二つの感想は現在の白川村においてあらゆる場面で聞かれるが、堂々巡りでいつまでたっても答が出ることはないだろう。

14 世界遺産の価値

世界遺産の内容

白川村荻町は平成七年、五箇山の平村相倉、上平村菅沼と共に世界文化遺産に登録された。荻町で世界遺産登録以降急激に観光客が増えたのは、消費の対象として「世界遺産」が認識されているからに他ならない。しかし、実際には何を価値として「世界遺産」になったのかについては数々の書籍やホームページにも記載されているが、今ひとつわかりにくい。ここでは荻町について、主に世界遺産推薦書^四から、世界遺産登録における価値付けやその経緯を整理してみたい。

本書の冒頭でも説明したように、「世界遺産」になるためには、「オペレーショナルガイドライン」に示されたクライテリア（登録基準）のうち一つ以上を満たさなければならず、さらに、その基準の「オーセンティシティ」に関する審査に通らなければいけない。文化庁が作成しユネスコに提出した「白川郷・五箇山の合掌造り集落」の世界遺産推薦書を概観してみると、全体は①位置、②法的なデータ、③遺産の内容、④保存状況、⑤世界遺産リストに登録する理由の五つの章から構成されており、さらに説明に必要なさまざまな地図や図面が付されている。^四

法的なデータとしては文化財保護法の伝統的建造物群保存地区であること、それに伴って制定された条例で保存計画がつけられていることが述べられている。世界遺産の三つの集落のうち、富山県にある五箇山の相倉と菅沼はいずれも昭和四十五年に国史跡に指定されている。伝統的建造物群保存地

区制度ができる直前で、まだ集落全体を対象とした保護制度がなかったため、この二つの集落を史跡にしたということのようだが、史跡と重要伝統的建造物群保存地区ではその「まもり方」がかなり異なっている。史跡は現状変更などの厳しい規制があるが、重要伝統的建造物群保存地区ではより柔軟なまもり方が可能である。世界遺産登録にあたってはこの「まもり方」をそろえるために、五箇山の相倉、菅沼も国の重要伝統的建造物群保存地区に選定され、推薦書でも重要伝統的建造物群保存地区に主に焦点をあてて保護制度が説明されている。

三番目の遺産の内容では、それぞれの地区の歴史がまず説明されている。地理の説明のなかではこの地域がいかに隔絶された場所であるかという説明があり、「かつては『日本に残された最後の秘境』とまでいわれたこともある」と書かれている。次に「内容」として、たとえば萩町の場合は、集落の骨格である道路、屋敷地が点在していること、伝統的建造物に指定された建物についての説明などそれぞれの集落の構成が述べられている。四番目の保存状況は保存を担っている地域の共同体の説明、保存の歴史と管理計画などが書かれている。

世界遺産の価値

五番目の「世界遺産リストに登録する理由」は興味深い論法となっている。まず、「日本は木造建築の文化が発達した最も重要な国の一つ」であることから始まっている。そして、貴族の住宅や社寺などの木造建築、それによって発達した技術についてふれた後、民家も木造でさまざまな形態があるとして、日本の農村の住居形態へと展開している。その後そうした農村建築の中でいかに「合掌造り

の建物」が特異な形態であり、最も発達した合理的な民家であるかという具体的な価値が三項目の箇条書きで述べられている。この社寺・貴族住宅から民家そして農村建築へとという展開からは、確実に「建築史」のもののさしをあてて価値付けされているのを読み取ることができる。

その次に「下記の点においても顕著な普遍的価値を持つ」として、以下の五つが示されている。

- ・かつて「日本に残された最後の秘境」と称されたこと
- ・庄川流域の「ユニークな」文化の現れである合掌造りによって構成される「特異な農村景観」
- ・日本の他では見られず、きわめて希少な存在であること
- ・現在壊滅的な状況であること
- ・そのようななかで「かつての集落景観を保持しているのは、法律によってその保護の措置がとられているこの三つの集落のみである」こと

これらの価値によって作業指針の以下の項目に該当することが証明されたのである。

(iv) 人類の歴史の重要な段階を物語る建築様式、あるいは建築的または技術的な集合体、あるいは景観に関するすぐれた見本であること。

(v) ある文化（または複数の文化）を特徴付けるような人類の伝統的集落や土地利用の一例であること。特に抗しきれない歴史の流れによってその存続が危うくなっている場合。¹⁰⁰

先にあげた価値は、このふたつの項目に照準をあてて書かれているために、まず合掌造りの建物のすばらしさを述べることで「すぐれた建築様式」の(Ⅳ)を満たし、次にその希少性と特異な景観を強調することで「存在が危うくなっている」「伝統的集落」の(Ⅴ)を満たそうとしていることがわかる。

これに続いてなぜ三つの集落がひとつの世界遺産として推薦されたのかについて理由が四つ述べられている。

- ・場所は離れているものの、唯一遺された古い合掌造り集落の好例であること
- ・かつてひとつの文化圏だったこと
- ・三つの集落はそれぞれ、規模の大きな集落、中規模の集落、小規模の集落の好例であり、集落の規模の多様性があったことを示す証拠となること
- ・同じ合掌造りの建物でも、白川郷と五箇山では違いがみられること

つまり、庄川流域というひとつの文化圏においてもさまざまな規模の集落があり、それぞれの特徴があったが、それを代表するものとして三つの集落が選ばれたと述べられているのである。曲解すれば、以前白川村において注目された小規模の保木脇、芦倉のような集落も菅沼、相倉というふたつの五箇山の集落によってその価値が潜在的に生き続けているともいえよう。

以上を見てみると、推薦書は「世界遺産の価値」に向かって積みかけるように論が展開されている多分に戦略的なものであることがわかる。つまり、文化財のときの「建築史のものさし」と同様に「世界遺産のものさし」に照準を合わせて推薦書が構成されているのである。

他地域の遺産との比較

次に登場する「価値の比較」は世界遺産のおもしろい特徴でもある。つまり他に同じような遺産がすでにある場合、いかにこちらのほうがすぐれているかというのを、延々と説明しなければならぬ。白川郷に限らず、この比較検討の部分は涙ぐましいものがある。余談だが、特に自然遺産ではこうした要求が厳しいため知床の推薦書などではロシアの遺産との「比較」がかなりのボリュームを占めている。白川郷の推薦書では他の個別の遺産をターゲットにした激しい比較はなく、三集落が選定されている重要伝統的建造物群保存地区の制度について「何の法律的な保護もないまま観光地化してしまっている他のアジアの国々の農村」とは違って、日本では「生きた村 (living village)」をまもる法的な措置が国や地方自治体で担保されているのだ、ということを説明している程度である。さらに建物や農地だけでなく、合掌造りの建物を維持するための「文化環境」をも保存するしくみができしており、それらは国によって担保されているだけでなく、住民によって主体的に受け継がれているものである、これも世界遺産の価値の背景である、としている。法的にも、社会的にも遺産の保護が保障されているということをここで述べているのであり、地区でよく聞かれる屋根葺きなどのための相互扶助の形態である「『結い』も世界遺産だから」というのはこれが強調されて伝わったものであろう。

推薦書の「大家族」の扱い

ところで、「大家族」はこの推薦書で触れられているだろうか。合掌造りの建物の詳しい説明のなかで、合掌造りの建物は「大家族」が要因で発達した、とかつて言われていたが、「大家族」が全部の集落で見られたわけではなく、よって、そのみが合掌造りの起源であるとは言えない。と、六ペーじに及ぶ合掌造りの建物の説明のうち五行分でわずかに触れられているのみである。荻町には「大家族」制があったわけではないので、この説明は正しい。しかし、世界遺産の価値は「大家族」を原点に白川村に対する外部からの視線が交錯し蓄積した結果であることを考えると、そのつながりがバツサリ切られてしまったという印象である。

もちろん推薦書は登録に向けて戦略的に書かれているものなので、その一字一句の揚げ足を取ることはあまり意味がない。世界遺産も現代という時代のひとつのものの見方、価値付けにすぎないとも言えるが、白川郷に関してはこの「世界遺産」という名前が一人歩きをしているような現状で、世界遺産のものさしで測られた「価値」と現実とのギャップによって「専門家」と呼ばれる人々からさまざまな問題を指摘されることになったのである。

15 消費の対象としての「ふるさと」

平成十七年から十八年にかけての冬はたくさん雪が降ったためか、多くのテレビの旅番組で白川村が紹介された。いずれも、タレントのグループや夫婦が荻町の民宿に宿泊し、城山に登って雪に埋もれた荻町の合掌造りの建物を見て感嘆の声をあげる、という内容で、荻町を表現するのに使うキーワードは郷愁、原風景、古き良き日本、昔話、おとぎの国、美しい心、素朴な暖かさ、といったものである。ちなみに、フジテレビ系の「もしもツアーズ」で、タレント一行が荻町の展望台に登ったとき、「一体この景色の何が我々の心をこれほどまで揺さぶるのだろうか。それは、私たちがこの里に古き良き日本を見るから……」という「白川郷」を称える内容の詩を森本レオが朗読した。森本レオの優しい声とバックミュージックの松任谷由美の「春よ」が雪景色に重なり、同行した女性タレントは思わず涙ぐむ。雪の荻町は確かにこのドラマチックな演出に足るほど美しい。

このように、現在の白川村は「ふるさと」や「日本の原風景」という言葉で語られることが多い。言うまでもなく、白川村が本当の故郷なのではなく、共有されたイメージとしての「ふるさと」「原風景」を白川村に求めているものである。資料を概観すると、この「なつかしい日本のふるさと」のイメージが急に広がるのは平成元年前後からだと考えられる。「ふるさと」が広がるまで白川村に関するイメージとして使われていた言葉は「桃源郷」「秘境」などであった。古くは大正九年（一九二〇）に大鶴利三郎が山に囲まれた飛騨を「秘密郷」としているのははじめ、昭和十年には鬼頭素朗が

大家族に関する書籍の巻頭言で「現存せる日本唯一の『古い日本』桃源郷……」と書いている。「大家族」で宣伝された「奇妙なもの」というイメージが「秘境」「悲しみ」に変化したことはすでに述べた。平成に入ってから広まった「ふるさと」がそれらと異なるのは、明らかに帰属意識、現在の自分に繋がっている「なつかしさ」がこめられていることである。つまり、文化の共有者としての「ふるさと」であるとも言えるが、これは「ふるさと」が個々の実在する場所から共有可能なイメージとなつて膨らんだ結果としてとらえることができるだろう。「故郷」に関して成田は以下のように述べている。

「ディスカバー・ジャパン」のキャンペーンに代表されるように、資本が、ツーリズムとサブカルチャーをとめない、「故郷」を創出し、演出する。イメージや語りそのもののなかに「故郷」が存するという意識がうみ出され、「故郷」がアイデンティティから解放され、消費の対象となつていくのである。¹⁶⁰

白川村のイメージも時代と共に「一気に「なつかしく心温まる日本のふるさと」へと押し上げられ、かつての「奇異」あるいは「悲しみ」のイメージは払拭されてしまったのである。

平成十四年の日本エアシステムの機内誌には「アメリカ人カメラマンが歩いた日本のふるさと白川郷」というタイトルの記事が掲載されている。¹⁶¹ここではカメラマンのピーター・ウェルド氏が民宿に宿泊し地元の人に話を聞き、最後には「白川郷は日本人だけのものではない。国籍は問わず、ここに

安らぎを感じる人すべてにとつての故郷なのだと思つた」と感想を述べている。良し悪しは別として、ここには何か「世界遺産」と共通するカラクリがひそんでいるとはいえないだろうか。「世界中のすべての人にとつて大切な遺産」がそれぞれの国に存在するということは（月や太陽や地球といったものならいざしらず）、実態として起こりえないものであるが、概念としてその普遍性を想定することはできる。白川郷も実態としてすべての「日本人」のふるさとではあり得ないが、「仮想ふるさと」という概念としてある普遍性を獲得しているとみることができらるだろう。

「ディスカバー・ジャパン」キャンペーンによつて「観光地」となつた白川村は特別なものではない風景、誰にとつても懐かしい「生活的風景」の対象となることが観光地化の契機であつたことはすでに述べた。「うさぎおいし、かのやま」と唄われる「なつかしいふるさと」のイメージは茅葺の屋根の建物に、広がる田、静かに流れる川、小高い山と裏の林という四点セットで構成されているのが一般的であろう。これは農業という生活によつて支えられている風景に他ならない。この四点セットを備えていた白川村荻町だが「生活的風景」をつくり出していた源である「農業」は立ち行かなくなり、「観光」へと大きく舵を向けた。さらに荻町は重要伝統的建造物群保存地区選定や世界遺産登録に伴つて、「特に価値の高い（文化財保護法第八十三条の四）文化財あるいは「顕著な普遍的価値を持つ（オペレーショナルガイドライン二十四項）」遺産であることを求められる状況を抱えることになった。世界遺産の視線からは「洗練された合掌造りの建物の構造」や「特異な集落景観」などの価値が、一般的に求められているすべての人の視線の先には「なつかしいふるさと」が同じ荻町の中に映し出されているのである。「特別な風景」と「特別な価値」はおそらく並行して交わることはな

い。遺産保護の立場から「価値が伝わっていない」「価値をまもらなければ」と警鐘を鳴らし、そのために正しく伝え、正しくまもることが必要だ、というのはいかにも正論である。しかし、ここで紹介したテレビ番組やガイドブックを見て白川村を訪れる「こころやすらぐふるさと」を求める多くの人々の意識の中に正しい「遺産としての価値」はどれほどの重要性を持っているのか。訪れる場所が「世界遺産」であるという「称号」以上にどのような価値を見出し得るのだろうか。

【脚注および文献】

- (1) 藤森峯三「飛騨ノ風俗及其他」『東京人類学雑誌』、一八八八年、三〇五～三一頁。
- (2) 藤森の約五十年後に「体格」について論じたものに海野金一郎「白川村加須良」『ひだびと』17、一九四二年、飛騨考古民俗学会がある。ここでも白川郷の人々は飛騨のなかでも身長が高く良い体格をしていると分析されている。
- (3) 高木正義「飛騨の白川村」『社会』19、一九九九年、七五九～七八七頁。
- (4) 溝口常俊「焼畑村落の展開過程に関する歴史地理学的研究—飛騨白川郷を例として—」『人文地理』38(2)、一九八六年。
- (5) 森岡清美「飛騨地方における真宗の展開…とくに白川郷の真宗寺院について」『淑徳大学社会学部研究紀要』35、二〇〇一年、一七三～一八七頁。
- (6) 白川村史編さん委員会『新編白川村史下巻』、白川村、一九九八年、一二二頁。
- (7) 「飛騨国白川村」『博聞雑誌第24号』、博聞雑誌社、一八八八年、一三五～一三六頁／高木正義、前掲書、一八九九年／本庄栄治郎「飛騨白川の大家族制」『京都法学会雑誌』63、一九一一年、一三一～一五六頁等。
- (8) 「風俗誌報發行主意書」『風俗西報第一号』、一八八九年、一～二頁。

- (9) 岐阜県農会「農村調査 白川村」『岐阜県農会雑誌』、一九〇九年、一〇二六頁。
- (10) 大鶴利三郎「飛騨の白川」『飛騨史稿第5巻第7号』、一九二〇年、一〇二九頁。
- (11) 富田稔彦「飛騨 大尾」斐太中央印刷所、一九三四年、一七〇～一七一頁。
- (12) 近藤雅彦「日本の屋根を往く―東西白川街道瞥見―」『郷土』一〇月号、一九三五年、三四～三八頁。
- (13) 『朝日新聞』、昭和二十一年十一月四日付。
- (14) 福田徳三「國民經濟講話 改訂増補」、大鑑閣、一八三頁。
- (15) 柿崎京一「飛騨白川村『大家族』の生活構造―シンガイ稼ぎの実態分析」『村落社会研究5(2)』、一九九九年、一〇二頁。
- (16) 柳田國男『文章世界』、一九〇九年(初出)、「同」『定本柳田國男集第二卷』、筑摩書房、一九六二年、一八七～一九五頁(参照)。
- (17) 相川春喜「飛騨白川村『大家族制』の踏査並に研究(上)」『歴史科学4(10)』、一九三五年、一五一～一六五頁。
- (18) 『飛騨・高山』、岩波写真文庫106、一九五三年、一二頁。
- (19) 藤島多治郎「飛騨白川・莊川村紀行」『建築知識2(11)』、一九三六年、一七～二三頁。
- (20) 市川健夫「風土発見の旅15」『地理37(12)』、一九九二年、七〇～七四頁。
- (21) 前掲(9)。
- (22) 岐阜県農会「農家住宅調査」、一九二二年。
- (23) 竹内芳太郎「飛騨白川村の民家」『早稲田大学建築學報2』、一九二三年、一〇二頁。
- (24) 藤原義一「古建築」、桑名文星堂、一九四三年、一六九～一八〇頁。
- (25) 江馬美枝子「白川村の大家族」、一九四三年(初出)、「同」『飛騨 白川村』、未來社、一九九五年、一四三～一五一頁(参照)。
- (26) 藤原義一「日本住宅史」、弘文堂書房、一九四三年、五～二六頁。
- (27) 前掲(24)。

- (28) 城戸久「庄川上流切妻造についての一推論」『日本建築学会論文集54』、一九五六年、八二九～八三二頁。
- (29) 宮澤智士『合掌造りを推理する』、白川村・白川村教育委員会、一九九五年、七七頁。
- (30) 宮澤智士『白川郷合掌造Q&A』、白川村・白川村教育委員会、二〇〇五年、一八～二〇頁。
- (31) 岐阜県白川郷文化フォーラム22実行委員会『こころの散策』、一九九三年、二〇頁。
- (32) 前掲(3)。
- (33) 前掲(7)。
- (34) 一九〇九年農村調査、一九二二年農家住宅調査、竹内、前掲、一九二三年。
- (35) 前掲(10)。
- (36) 蘆田伊人編『大日本地誌大系23 妻太後風土記 上』、一九三〇年(明治六年(一八七三))に富田禮彦が執筆、その後昭和五年に出版したものを参考文献とした。
- (37) 桑原貫之助『岐阜県案内 全』、岐阜県農会、一九〇一年(一九八六年発行の岐阜県郷土資料研究協議会による復刻版を参照)。
- (38) 『旅』、一九五九年八月、三六頁。
- (39) 前掲(19)。
- (40) 藤島多治郎「飛騨白川・荘川村紀行(3)」『建築知識212』一九三六年、二二～二四頁。
- (41) 前掲(23)。
- (42) 稲垣栄三「山村住居の成立根拠(1)～(3)」『建築史研究10/12/15』、一九五二～一九五四年。
- (43) 小川隆「庄川峡の今と昔」『世界の旅・日本の旅17』、修道社、一九六〇年、一二七～一三三頁。
- (44) 『飛騨・高山』、岩波写真文庫106、一九五三年、五～一〇頁。
- (45) 菱村正文「加須良紀行」『飛騨春秋919』、一九六四年、五～九頁。
- (46) 海野金一郎「飛騨の夜明け」、農山漁村文化協会、一九八〇年。
- (47) 「荒廃の合掌づくり 家を捨て集団離村」『朝日新聞日曜版』、一九六八年六月三十日付。
- (48) 宮澤智士『合掌造りを修復活用する』、二〇〇〇年に野外博物館合掌造り民家園に加須良や合掌造りの建物

の詳細な説明がある。

- (49) 西村幸夫『環境保全と景観創造』、鹿島出版会、一九九七年、一四六頁。
- (50) 太田博太郎『建築士の先達たち』、彰国社、一九八三年、一〇頁。
- (51) 今和次郎『日本の民家』、相模書房、一九五四年、二〇九～二二三頁。
- (52) 前掲(23)。
- (53) 藤田元春『日本民家史』、刀江書院、一九二七年、六六四～六七四頁。
- (54) 石原憲治『日本農民建築』、南洋堂、一九三四年。
- (55) 緑草会『民家図集4』、大塚巧芸社、一九三〇年、一～一〇頁。
- (56) 前掲(23)。
- (57) 竹内芳太郎『年輪の記—ある建築家の自画像』、相模書房、一九七八年、三二九～三八〇頁。
- (58) 農村建築研究会「飛騨白川村の民家について」『日本建築学会研究報告13』、一九五一年。
- (59) 前掲(55)。
- (60) 前掲(40)。
- (61) 稲垣栄三「山村住居の成立根拠(1)～(3)」『建築史研究10/12/15』、一九五二～一九五四年。
- (62) 前掲(50)、一三五～一三六頁、一六〇～一六一頁。
- (63) 稲垣栄三「技術による日本の征服」『文化遺産の危機と保存運動』、青木書店、一九七一年、七二～八一頁。
- (64) 前掲(50)、一六七頁。
- (65) 岐阜県教育委員会『荘白川総合学術調査報告書上』、一九五七年、一一五～一三八頁。
- (66) 竹内芳太郎、日本民俗建築学会『民俗建築大辞典』、柏書房、二〇〇一年、三九三頁。
- (67) 笹間一夫『今昔「飛騨から裏日本へ」タウトの見たもの』、井上書院、一九七九年。
- (68) ブルーン・タウト『Houses and People of Japan』、三省堂、一九五八年、一一頁（初版発行一九三七年）。
- (69) ブルーン・タウト『日本美の再発見』、岩波新書、一九八九年、五三頁。
- (70) World Heritage THE HISTORIC VILLAGES of SHIRAKAWA-GO and GOKAYAMA Traditional Cassio

Style (1994): Agency for Cultural Affairs, Government of Japan.

- (71) 井上章一『つくられた桂離宮神話』、講談社学術文庫、一九九七年、一一九頁。
- (72) 和田正美「観光立村をめざす飛騨白川」『月刊自由民主346』、一九八四年、一〇二―一〇五頁。
- (73) 白川村史編さん委員会『新編白川村史中巻』、白川村、一九九八年、八一〇頁。
- (74) 溝口歌子、小林昌人『民家巡礼』、東峰書院、一九六一年、一二一―一二七頁。
- (75) 石山賢吉『庄川問題』、ダイヤモンド社、一九三二年(当時盛んだった林業の流送をめぐる争いが訴訟問題に発展した)。
- (76) 前掲(73)、七一一―七三八頁。
- (77) 30年史編纂委員会『電源開発30年史』、電源開発株式会社、一九八四年、一二八頁。
- (78) 前掲(72)。
- (79) 大野郡白川村史編纂委員会『白川村史 全』、一九六八年、九五―一頁。
- (80) 一九八〇年代までは八割のガイドブックで紹介されていたが、一九九〇年代以降四割に減少している。
- (81) 白川村史編さん委員会『新編白川村史上巻』、白川村、一九九八年、三〇六頁。
- (82) 前掲(11)、一七四頁。
- (83) 白木紫峰『飛騨白川郷の風物』、新飛騨社、一九五〇年、三八頁。
- (84) 前掲(79)、五一〇頁。
- (85) 前掲(74)、一二六頁。
- (86) 前掲(49)、一五〇頁。
- (87) 前掲(73)、八二三―八二四頁。
- (88) 大河直躬『カラー日本の民家』、山と溪谷社、一九八〇年、二二―二三頁。
- (89) 白川村教育委員会『白川村荻町伝統的建造物群保存地区調査報告書』、一九七四年。
- (90) 白川村教育委員会『白川村の合掌造り集落』、一九八七年。
- (91) 前掲(49)、一五四―一五五頁。

- (92) 西山徳明 他「伝統的建造物群保存地区における景観管理計画に関する研究」『日本建築学会計画系論文集 474』、一九九五年、二三三～四二頁／西山徳明 他「伝統的建造物群保存地区選定後の集落景観の変容と維持に関する研究」『日本建築学会計画系論文集 474』、一九九五年、一五一～一六〇頁 など。
- (93) 山田講一「白川村荻町保存の問題点」『歴史的町並み総点検 環境文化 No.50』、(財)環境文化研究所、一九八一年、一五六～一五八頁。
- (94) 村内向けの機関紙である『広報しらかわ』は昭和三十八年からのバックナンバーがある。
- (95) 西山徳明「観光開発地域における文化変容と演出設計および景観管理計画に関する研究」(学位論文)、京都大学大学院工学研究科、一九九五年。
- (96) 『旅』(出版者変更：日本旅行文化協会→日本交通社(一六二巻一〇号)、JTB 日本交通公社出版事業局(六二巻一一号))は大正十三年から現在に至るまで発行されている旅行雑誌。
- (97) 加藤典洋『日本風景論』、二〇〇〇年、一九八一～一九九頁。
- (98) 『ブルーガイドブックス高山と飛騨路』、実業之日本社、一九六八年、一六八～一七五頁。
- (99) 『トラベルメイト 24「木曾・高山」』、近畿日本ツーリスト、一九八八年、四四～四七頁。
- (100) 早船ちよ「私の飛騨」、けやき書房、一九七五年、一九八～一九九頁。
- (101) 岡村精次「飛騨白川村の大家族制」、岐阜県学務課、一九二九年、五九頁。
- (102) 前掲(74)、一二五頁。
- (103) 毎日グラフ別冊『消えゆく日本の民家』、一九七〇年、一〇九頁。
- (104) (財)世界遺産白川郷合掌造り保存財団「『観光客の受入対策の調査報告書及び実施プラン』の調査におけるアンケート」、二〇〇二年。
- (105) World Heritage THE HISTORIC VILLAGES of SHIRAKAWA-GO and GOKAYAMA Traditional Gassho Style (1994) : Agency for Cultural Affairs, Government of Japan.
- (106) これは「白川郷・五箇山の合掌造り集落」の場合で、他の推薦書も同じ内容と形式というわけではない。
- (107) 改訂前の評価基準による。翻訳は http://www.unesco.or.jp/contents/jsan/toha_index.htm より。

鬼頭素朗『本邦古代の奇習飛騨白川大家族を語る』、郷土資料調査会、一九三五年、三頁。

成田龍一『故郷』という物語、吉川弘文館、一九九八年、二一～二三頁。

『日本のふるさと白川郷』、『日本エアシステム機内誌』ARCAS、二〇〇三年六月、二八～二九頁。

勝原文夫『農の美学』、論創社、一九七九年、一九～二五頁。